

青少年ツーリズム 交流国際セミナー

報告書

日 時：2008年11月10日（月）9：30～18：00
[交流会・意見交換会（18：10～19：30）]

場 所：大阪国際会議場 12F「特別会議室」

主 催：観光庁、世界観光機関（UNWTO）

後 援：大阪府、日本政府観光局（JNTO）

協 力：国連アジア太平洋経済社会委員会（UNESCAP）、
立命館アジア太平洋大学（APU）、阪南大学

使用言語：英語、日本語（同時通訳）

青少年ツーリズム交流国際セミナー



会場風景

パネルディスカッション



パネルディスカッション

集 合



スタディツアー



プログラム

9 : 3 0 開会挨拶 P.3

各務 正人 国土交通省近畿運輸局長
本田 勇一郎 世界観光機関（UNWTO）アジア太平洋センター代表
橋下 徹 大阪府知事（代読 大阪府にぎわい創造部長 正木 裕）

1 0 : 0 0 基調講演「アジア・太平洋地域における
青少年ツーリズム交流の現状と課題」 P.7

山川 隆司 UNESCAP ツーリズムユニットチーフ

★アジア・太平洋各国の青少年ツーリズム交流の取り組みと課題★

1 0 : 2 5 講演「香港・日本 青少年ツーリズム交流」 P.14

ケイ チョン 香港理工大学 ホテル&観光業管理学院 筆頭教授 兼
学院長

1 0 : 5 0 講演「韓国・日本 青少年ツーリズム交流」 P.18

イム サンテク アジア太平洋観光学会（APTA）会長
ドンア大学 国際観光学部教授 兼 観光研究機関所長

1 1 : 1 5 コーヒーブレイク

1 1 : 3 0 講演「タイ・日本 青少年ツーリズム交流」 P.21

スワット・ジュタコーン タイ観光庁（TAT）政策・計画局
市場データベースグループ部長

1 1 : 5 5 講演「オーストラリア・日本 青少年ツーリズム交流」 P.25

マルコム・クーパー 立命館アジア太平洋大学副学長

1 2 : 2 0 昼食休憩

★日本の青少年ツーリズム交流の取組みと課題★

13:20 講演 「日本（関西）の青少年が求めるアジア・太平洋各国理解のためのツーリズム交流の形態」 P.28

前田 弘 阪南大学教授

13:45 講演 「訪日教育旅行における学校交流の現状」 P.32

湯浅 勝史 財団法人大阪観光コンベンション協会
学校交流コーディネーター（特命顧問）

14:10 講演 「旅行業界から見た日本の青少年ツーリズム交流の現状と課題」 P.36

高松 正人 ツーリズム・マーケティング研究所 取締役マーケティング事業部長

14:35 コーヒーブレイク

★パネルディスカッションとQ & A★

14:50 パネルディスカッションと Q & A
「日本とアジア・太平洋各国の青少年相互理解に資するツーリズム交流の形態はどのようなものか」 P.45

司会：高松 正人 ツーリズム・マーケティング研究所 取締役マーケティング事業部長
パネリスト：阪南大学学生4名、APU留学生4名
コメンテーター：各講演者

17:30 結論 P.65

高松 正人 ツーリズム・マーケティング研究所 取締役マーケティング事業部長

★セミナー総括★

17:45 総括 P.66

山川 隆司 UNESCAP ツーリズムユニットチーフ

18:00 終了

★交流会・意見交換会（18:10～19:30）★ 12F「グラントック」にて

11日 スタディーツアー P.67

開会挨拶

国土交通省近畿運輸局
世界観光機関(UNWTO)アジア太平洋センター
大阪府

開会挨拶

国土交通省近畿運輸局長 各務 正人



ただいまご紹介いただきました、国土交通省近畿運輸局長の各務でございます。UNWTO青少年ツーリズム交流国際セミナーの開会にあたりまして、ひとことご挨拶申し上げます。

本セミナーに多数の方々にご参加いただきましたことに対しまして、心から御礼申し上げます。

さて、本セミナーは、豊かな感性と強い感受性を持ち合わせた青少年のツーリズム交流のあり方について、議論を深め、共通認識を得ることを目的としております。

最近の流出入動向を申し上げますと、日本に來訪する若年層は年々増加傾向にあり日本への関心度が高まっている中、日本の若年層の渡航は減少傾向が続いており、その原因については明確にされていない状況であります。青少年のツーリズム交流の拡大は、単に双方向の旅行者が数の上で増加することにとどまらず、持続的な国際間の相互理解の促進と友好関係の強化を促進し、ひいては国際平和にも貢献することが期待されるものです。これまで青少年をターゲットとしたテーマによるセミナーの開催は多くないので、今回、未来を担う若年層の視線に立って状況やニーズを論じる青少年のツーリズム交流発展に向けたセミナーは大変時宜を捉えた有意義なものになると認識しております。

申すまでもなく、このテーマによるセミナーは、我が国の観光立国に向けた施策の上でも、大きな意義を有しております。

観光立国は、21世紀における、より魅力的でより美しい日本の発展に向けた、政府の重要政策です。その推進のため、2007年6月には「観光立国推進基

本計画」を閣議決定し、2010年に訪日外国人旅行者数を1,000万人にする、2010年に日本人の海外旅行者数を2,000万人にするなど、具体的な目標や施策を定め、そのための様々な取組みを進めているところです。さらに、それらをより一層強力に推進するため、本年10月には、国土交通省内に観光庁を設置したところです。

「観光は平和へのパスポート」という言葉がありますが、青少年の皆さんによるツーリズム交流拡大は、まさにその言葉を体現するものであり、そのことが、我が国の観光立国実現にも大きく貢献していただくことになると認識しております。

本セミナーが、青少年の皆さんによる相互交流活発化の契機となるとともに、観光立国実現に向けた重要なステップとなることを切に願っています。

最後になりましたが、本シンポジウムの準備を主体的に進めてくださった、財団法人アジア太平洋観光交流センター、大阪府、日本政府観光局、さらには、国連アジア太平洋経済社会委員会（UNESCAP）、立命館アジア太平洋大学（APU）、阪南大学、並びにその他関係者の皆様方に心から感謝申し上げます。

どうもありがとうございました。

開会挨拶

世界観光機関 (UNWTO) アジア太平洋センター代表 **本田 勇一郎**



皆様、おはようございます。

国連世界観光機関 (UNWTO) アジア太平洋センター代表を務めております本田でございます。

本日は国交省近畿運輸局各務局長様、大阪府正木にぎわい創造部長様、またご会場にお集まりの皆様、ご多忙にもかかわらず、おいで頂きて誠にありがとうございます。

次世代を担う世界、日本の青少年のツーリズムがどのようなになっているのか、実態を数字で捉えることは、かなりの困難を伴いますが、これは私ども UNWTO としても非常に関心のあるテーマです。

UNWTO による 2005 年段階の調査では、全世界的には、青少年、つまりユースツーリズムは非常に伸びているのではないかと報告が一応出ています。

一方、日本の青少年ツーリズムの近年の傾向はどうかのでしょうか。教育旅行、修学旅行を別として、青少年が個人ベースでは積極的に海外に従来のようには出て行かなくなったのではないかとこの声も聞こえて参ります。1970 年代から日本の青少年は、果敢に海外に飛び出していったのですが、現代は、ひょっとして、例えば大学卒業旅行も団体旅行、パッケージ旅行を利用するといった方向に大きくシフトしているかもしれせん。

我が国は国、地方自治体の皆様、また、観光業界関係者の皆様のご努力もあり、近隣諸国とのツーリズム交流そのものは活発化してきています。本日はそれをアジア太平洋、あるいは世界一般の青少年自身のツーリズム交流に焦点をあてて、国連アジア太平洋社会経

済委員会 (UNESCAP) から、そして香港、韓国、タイからの非常に著名な専門家の皆様から講演をして頂きます。また、本日のセミナーは UNWTO 本部と観光学術関係で提携をしている立命館アジア太平洋大学の先生方、留学生の皆様、更には関西の阪南大学の先生方、観光を専攻している学生の皆様から全面協力を頂き、参加頂いております。

皆様のお力によって、青少年ツーリズムの実態を解明し、それに合わせた国、地域の受け入れ態勢はどのようにしていけばいいのか、また青少年自身のツーリズムの価値観、あり方はどのようなものかなどを青少年の皆さん自身も交え、論じて頂くことになっていきます。

本日の講演、パネルディスカッションの結果が、日本、関西の海外からの青少年の受け入れ促進のヒントとなり、また、日本の若者によるアジア太平洋をはじめとする世界各国への雄飛の一助となって、ツーリズム交流をとおして、お互いの理解がますます深まることを祈念して、私の挨拶に代えさせていただきます。ありがとうございました。

開会挨拶



大阪府知事 橋下 徹

(代読 大阪府にぎわい創造部長 正木 裕)

開催地の地元自治体を代表しまして一言ご挨拶を申し上げます。

国際観光交流を推進する世界観光機関（UNWTO）アジア太平洋センターは、大阪府が平成7年に関西国際空港のお膝元、りんくうタウンへの誘致に成功したときからの深い関係もあり、本日の「世界観光機関（UNWTO）青少年ツーリズム交流国際セミナー」のご盛会を心より喜び申し上げます。

世界の国際化がますます進展する中において、日本の国際化を進展させるためには、次代を担う青少年が、早い時期に世界中の青少年と交流を通じて相互理解を深めておく必要があると感じています。

また、一般的に教育旅行と呼ばれる青少年ツーリズムを通じた交流は、情操教育上の効果だけでなく、将来の世界平和に大きく寄与するものと確信しています。

このセミナーは、アジア太平洋地域における「青少年ツーリズムの現状把握」、「青少年達の求めている相互理解のためのツーリズム交流の探求」、「交流を推進するための受入体制の整備について」など、幅広い視点で充実したプログラムが組まれており、有意義なセミナーになると期待しております。

大阪府においては、府の独自交流事業に加え、内閣府の「青少年国際交流事業」や外務省の「21世紀東アジア青少年大交流事業」なども活用しながら、積極的に、東アジア地域における青少年ツーリズム交流に取り組んでいます。

その青少年交流の現場において一番難しいのが学校

間のマッチングです。

大阪府では、財団法人大阪観光コンベンション協会に学校交流コーディネーターを設置し、コーディネーターを通じて、東アジア地域の各国学校が求めるスポーツ交流や文化交流など様々なオーダーに対し、各校の得意分野、特徴的な取組みなどを迅速にマッチングさせています。

1校ずつの丁寧な草の根的な交流を重ねた結果、昨年度は、1万1千人以上交流を実現しました。交流した多くの参加校からは、満足したという声をいただいています。

本日も、学校交流コーディネーターの講演を予定しておりますので、楽しみにしておいてください。

最後に、この会議を通じ、積極的な交流、意見交換を実現され、その成果が広く世界に発信されますとともに、参加者の皆様が有意義な時間を過ごされますよう祈念いたしまして、私からの挨拶とさせていただきます。

平成20年11月10日

大阪府知事 橋下 徹
(代 読)

基調講演

「アジア・太平洋地域における 青少年ツーリズム交流の現状と課題」

国連アジア太平洋経済社会委員会 (UNESCAP)

ツーリズムユニットチーフ

山川 隆司

「アジア・太平洋地域における青少年ツーリズム交流の現状と課題」

国連アジア太平洋経済社会委員会（UNESCAP） ツーリズムユニットチーフ

山川 隆司



テーマに、アジア・太平洋地域における青少年の観光の振興ということをつけ加え、より広い観点からの話にします。青少年観光の実態を把握する数字はなかなか出てきません。それほど統計的なデータの調査もないので、トレンドの話ということになります。

青少年観光とは一体何であるのかということ、まず取り上げ、続いてアジア・太平洋の青少年ツーリズムの現状と今後、また、UNESCAPの話をしていきます。この話が社会、経済の観点から青少年ツーリズムにどのようにかかわっていくのかという背景説明にもなると思います。また青少年ツーリズムを振興する際に考えなくてはならない課題、私の推奨にも触れます。

青少年ツーリズムの定義については、世界青年学生教育旅行連盟（WYSE）は個人としての独立した旅行が入り、その期間は1年未満、年齢層は16歳から29歳としています。1年を超えると青少年ツーリズムとはなりません。親が見つからないインディペンデントであり、また学習のチャンスがあるというのが青少年ツーリズムの根幹にある特徴だと言えます。

青少年ツーリズムは非常に重要な市場でもありますが、政府、民間双方によって十分に認識されていません。世界観光機関によれば、青少年の旅行が、国際的な観光客の20%以上を占めていて、1年間で国際的に旅行をする青少年の数は1億6,000万人以上、そして1,360億ドル以上の収入がもたらされていると推定されています。では、どういう動機で1億6,000万人の人が海外旅行をするのでしょうか。81%の人たちが、自分たちの知識を広め文化を探索したい、その地の人と友情を高め、交流を深めたい、その地の日常生活を経験したいと、そうしたことが挙げられています。また、若い人たちはより長く滞在するという傾向があります。そして、お金を直接的に使って、そこで生活をします。その支出額はそれほど大きいものでは

ないかもしれませんが、全額で計算をすると、その地域の経済に大きな貢献をする可能性があるということです。

いろいろなところに若い人たちが行き、ツーリズムを主要な観光の拠点以外のところにも広げるのです。例えば、タイでは、バンコク、チェンマイ、プーケットなど人気のところ以外にも青少年ツーリストは行きます。コーチャン、コーサム、コーピーピーへ行ったりすることによって、主要な観光の拠点以外のところもやはりツーリズムの恩恵を受けるといえます。若い人たちは直接的にその地域の人たちとコンタクトをしたいと考え、また自分たちだけで、あるいは一人で旅行して文化との遭遇、そして社会的なインターアクションをとろうという気持ちが強いわけです。

こうした若い人たちにサービスを提供する側ですが、事業としては資本投資がそれほど高くなくてもいいのです。宿泊施設にしても、五つ星のホテルのように高いものでなくてもいい。リーズナブルな安価なホテル、あるいはユースホステルやゲストハウスに泊まる若い人たちは多いと思います。そのような宿泊施設を始めようとする場合の資本コストは、豪華なホテルを始めようとする場合と比べますと、その投資額はずっと少なく済むということです。また、若い人たちが旅行することは社会にもとても重要な役割を果たしていると思うのです。その若い人たち自身にも大きな影響を与えています。知識がふえますし、他の文化を理解することができるようになります。その人たちが旅行から帰ってきますと、自分たちは一層グローバルなコミュニティの一員なのだという気持ちを高め、自分たちの地平線を高めた、広めたということ、さらに心は開かれ、自信を持ちながら人を許す気持ちを持って接することができるようになると思います。

UNWTO、WYSEのレポートによれば、若い人

たちの80%がインターネットでいろいろな情報を得て、そして旅行に出かけるということです。新しい技術を使って家にいながら情報を得、50%の人たちがインターネット予約をしているということもわかりました。民間の事業としては、このマーケットにいかにかけるかということが重要になります。そして、ウェブサイトで観光関係の商品や、いろいろなプログラムを打ち出すことが必要でありましょう。そうした投資は将来に対するものです。前向きな経験を積んだ若い人たちが、今度はリピーターとなって、同じところに旅行するということが多いわけで、将来につながります。

UNESCAPの定義するアジア・太平洋地域は、トルコまでの西、そしてロシアが北、またオーストラリアが南となります。太平洋の島嶼（とうしょ）諸国も入っています。この地域は人口稠密ですし、その開発の度合いがいろいろと違う53カ国と9の地域があります。ダイナミックな経済成長、経済の安定をもたらすところであります。そして、そのパワーハウスとなっているのが日本、韓国ということでしょう。オーストラリア、ニュージーランドは先進の国で、高所得の国民が住んでいます。また、経済のエンジンの役割を果たしているのが、非常に巨大な人口を抱える中国とインドです。そしてASEAN諸国がありますが、今、堅調な推移で拡大を続けている経済国です。

その一方、14の最貧国と呼ばれる国があります。国連の定義にのっとってということで、カンボジア、ミャンマー、ラオスPDR、ネパールといったところでは、さらに、17の島嶼諸国であります。フィジー、サモア、といった開発ということでは、遠隔の地というところから市場としてもハンデを負っている国です。また、8億の人たちがこの地域に住んでいて、また全世界の貧困層の67%がこの地域にあります。貧困層といえますのは、1日当たりの所得が1米ドル以下の人たちを言います。

アジア・太平洋地域は今、世界を変える力があるのだと考えます。もしアジア・太平洋の経済が今後とも繁栄を続け、そしてグローバルな経済の安定をもたらすことができれば、貢献は大きいと思います。反対に

インドとか中国がその経済の拡大がストップするということであるならば、グローバルな経済危機というものにさらに拍車がかかってしまう可能性があります。アジア・太平洋地域というのは、地域として全世界を変える、その要となる地域だと言えます。

では、アジア・太平洋のツーリズムに話を移しましょう。過去数年間、急激に伸びてきました。その伸びの度合いは、ほかの地域を超えています。巨大な潜在能力がまだあって、今後とも成長可能と考えます。というのも、地域の経済が非常に強いということ。そして輸送であるとか、航空路線などの整備が進んだ。さらにまた、ローコストの航空会社もふえています。多くの国々、地域においてツーリズムを優先課題としています。そして、その進展を目指して査証なども円滑ということでもいろいろと努力をしています。さらにASEAN諸国同士での協力というものも態勢として強まっています。

では青少年のツーリズムが今後拡大の可能性が大きいのだということをご紹介しましょう。それは航空路線の整備ということでもありますし、ローコストのエアラインが台頭してきたということなのです。さらに重要なのは、この地域は自然の景観が美しく、文化遺産にも恵まれていて、それが魅力となっているのです。54カ国ぐらいユニークな文化・伝統がある。そしてまた、もてなす伝統がありますし、また自然の景観が美しいということとあいまって、すべての国が若い観光客を受け入れる素地があるということなのです。さて、市場を考えてみますと、このようなユースツーリズムを送り出す側の国ですが、それは経済力の強い国に限られます。また、スチューデントツアーが今ふえています。オーストラリア、そしてニュージーランド、日本、タイ、マレーシア、シンガポール、韓国といったところでは、学生のツアーは今重要になってきています。例えば、日本の場合には、大学ですと、100を超えるようなエキストラカリキュラムのクラブ活動を盛んにしています。そうした大学からツアーをするということなのです。二、三十年前であるならば、日本国内に限られていたのですが、今ですと、テニス

クラブがタイに行って、クラブ活動をするということです。タイにはテニスとかゴルフの施設があるので、そこを使うことができます。ですから、そうした領域でも今後、交流をする可能性はとても高いと言えます。

ワーキングホリデーも一つの重要なやり方です。特に若い人たちがより長く滞在するオーストラリア、ニュージーランド、そして韓国、日本などがそれをオファーしています。スポーツや文化の交流イベントというのも、非常に可能性は高いと考えます。第24回ユニバーシアードですが、これは第2の大きなスポーツイベントということで、オリンピックに次ぐものであります。そして、それが昨年バンコクで開かれ、152カ国9,000人のアスリートの参加がありました。スポーツ、文化のイベントは、非常に大きなインパクトを持っています。国内のツーリズムにも話を進めたいと思いますが、これも重要なのです。

国内旅行

青少年の国内旅行は、国内の富の再分配・経済発展に寄与する。

海外旅行と国内旅行の比較
アジア・太平洋諸国より抜粋

	基準年	国際観光客 到着数 (100万人)	国内旅行者数 (推定) (100万人)	国際観光 対 国内旅行
中国	2005	46.8	1,212.0	1:26
インド	2003	2.8	309.0	1:110
インドネシア	2005	5.0	31.3	1:6
タイ	2005	11.6	79.5	1:7
ベトナム	2003	2.4	13.0	1:5

この表にあるように、中国を見てください。右側に、海外と国内というふうに、その比率を示しています。国内のほうが26倍になっています。そして、インドは、さらにそれが大きくて、110倍です。ということは、これは到着でありまして、国内に入ってくる観光客の数であります。UNWTOのスタディーがあり、その20%が青少年ツーリズムのカテゴリーに入る人たちだということです。ですから、国内のツーリズムに、若い人たちが参加するものにもっと注目していいと思います。それも経済の進展をその国内で推進するのに大きな役割を果たしているということ。さらにまた、意識喚起ということにもなりましょう。自分

の国の文化・伝統を学ぶということが出来るわけです。国内旅行はまた、海外への旅行に比べまして、経済変動などに対しても余り見舞われにくい、安定して行われるということが知られています。

次にツーリズムをより若い人たちに対して振興する際に何を考えるべきなのかということです。

まず、青少年ツーリズムは効果的に国連の掲げる目標を推進する力があるということです。社会経済的な進展、開発、貧困の撲滅、そして環境の保護といったことであります。経済的に見ますと、海外旅行は外貨獲得ということで非常に重要なソースになる場合が多いわけです。

**ラオス人民民主共和国の観光業
各産業の収益および順位
(収益の単位：100万米ドル)**

	2001		2002		2003		2004		2005	
	収益	順位	収益	順位	収益	順位	収益	順位	収益	順位
旅行	113.8	1	113.4	1	87.3	2	118.9	1	146.7	1
衣料品	100.1	2	99.9	2	87.1	3	99.1	2	107.5	3
電力	91.3	3	92.7	3	97.3	1	86.2	3	94.6	4
木製品	80.2	4	77.8	4	69.9	4	72.4	4	74.0	5
コーヒー	15.3	5	9.8	7	10.9	9	13.0	8	9.5	8
農産品	5.7	6	25.6	5	11.1	8	20.5	6	26.6	6
鉱物	4.9	7	3.9	8	46.5	5	67.4	5	128.3	2
工芸品	3.8	8	2.7	9	12.4	7	1.9	9	2.7	9
その他	-	-	19.9	6	17.1	6	13.4	7	11.9	7

ラオスのデータがあります。最貧国の一つになるわけですが、観光がナンバーワンの外貨獲得の産業だということです。電力がありますが、ラオスはタイから電力を買っているのです。そして、ツーリズムがありますが、将来を考えるならば、ラオスはやはりそこに依存するということが見えます。

多くの最貧国に入る国々は、ツーリズムから多くの便益を得ることができるわけで、その例がここで描かれています。さらにまた、社会の開発にも寄与することができるのが、このようなツーリズムであります。ツーリズムのセクターがどのような形で貢献しているのか、GDPの31%であるということがわかっています。そしてまた、外貨獲得の重要なソースであり、また税収源ともなっています。さらに政府は財政的な資源をそこに投入するということで、教育あるいは健康状態、保健状態を改善しようと努めます。そうした

ことによって、モルディブでは、今 100%の識字率になったということで、大きな社会的な進展があったということです。そしてまた、乳幼児の死亡率ですが、1977年には人口 1,000 人当たり 121 死亡あったものが、2004年には 1,000 人当たり 38 死亡になっています。また、寿命も長くなっている。47年から67年ということです。そして、これが可能になったのは、ツーリズムが繁栄したからです。これがなくては達成することは不可能であったと考えます。

さて、アジア・太平洋地域の重要な課題は、いろいろな意味で貧困だと思います。国連は「ミレニアム宣言」を発表しました。そして、加盟国が1日当たりの所得が1ドルを切るような、そうした所得の人たちの数を2015年までに半減するというコミットをしています。貧困との戦い、そしてその関係でツーリズムの産業を考えるということになりますと、やはりいろいろなポテンシャルの力が結集して、社会経済的な進展という形で実を結ぶ可能性が高いということがわかると思います。

さらにまた、貧困の撲滅につきましては、物を買うということ、また地元からサービスを購入することによって、直接的に貢献できるわけです。自分がどこに行くのか、どういうふうに行きようか、何を買いようかというふうなことを考えるときに、その国々の便益も考えて決断をしてもらえるようになればと希望します。そして、環境とか文化遺産というものに対しても認識が高まるでしょう。地元の文化、自然環境といったものを慈しむ心が生まれると思います。青少年旅行者が尊敬の念を持って地元の文化を尊び、自然を愛し、そうすることによって文化と自然の環境の保全に努める、それに貢献できるようにと願っています。

若い人たちが世界平和の構築に貢献できると思いますが、ツーリズムはその意味で異文化間の理解、違う国同士の間での理解の深まりであると思います。それは世界全体の平和の高まりということに帰結すると思います。地元の人と交流すること、そして文化を学ぶということ、そうすることによって平和を促進し、全世界の平和の環境に貢献しているのだということが

認識されるべきだと思います。

青少年のツーリズムにおいては、非常に重要なアジアチブでプログラムを実行している国があります。オーストラリアはワーキングホリデーを持っています。そしてまた、日本、シンガポールもそうです。インドですが、ユースツーリズムパッケージという施策で臨んでいます。これは、第9次5カ年計画の中に盛り込まれているものであります。そしてまた、フィリピンのほうでも、ユースツーリズムポリシーがつくられていて、そのマーケティングで努力をしています。タイは、スポーツ・文化のイベントを促進しようということで力を入れています。

一つの地域間の連帯、その協力ということで学生交流の話をして。ネットワークをしようということ。アジア・太平洋が観光部門の人材育成ということで、UNESCOが1997年につくったものがあります。アペティットと呼ばれていますが、45カ国、252の参加の機関があります。そして、学生の交流プログラムがありまして、オーストラリア、マレーシア、香港、マカオ、韓国、タイ、イランが入っています。どの国がどれぐらいのメンバー機関を持っているのかということですが、インドが38、ベトナムが39、そして日本は立教大学と立命館大学、そして埼玉大学、そして日航財団となっています。非常に有用な情報、データ、そしてネットワークのチャンスにつながるようなものが提供されていますので、そのホームページを見ていただければと思います。アペティットのネットワークがこのような協力を進化、そしてまた拡大しようということで、教育を目標として、いろいろなところに展開していくと思います。それにより、有用な情報をさらに分かち合えるようにということを目指しています。

さて、ユースツーリズム振興のために何が重要なことかということ、あるいはどのような課題、困難性があるのかということを考えています。

大きな問題は、統計データがないということです。その規模がどうであるのか、インパクトがどうかということ。どのようなプロフィールの、何歳ぐらい

の人ということが、統計的なデータがほとんどの場合でないのです。また、その人たちがどれぐらいお金を使うのかというデータも余りありません。

2つ目ですが、1つ目の問題に関係していますが、データがないということから、そのユースツーリズムが政府のほうでプライオリティーを与えていない、優先順位としては高くないということです。若い人たちは余りお金を使わないのだというふうに産業界のほうでも考えてしまうということです。したがって、政府も民間も認識が薄いということが言えましょう。

3つ目ですが、したがって社会経済の観点から、きちんと調整されたポリシーをつくる必要があると思います。ユースツーリズムを振興させるならば、やはりハーモナイズされた形ということだと思います。ツーリズムだけではなく、教育とか文化ポリシー、また青少年に対する政策、そうしたものが全部コーディネートされる、あるいは移民政策もかかわるといった形でする必要があると思います。コーディネートされたポリシーがあって初めて、このような青少年ツーリズムが進展できると思います。多くの国々でビザ発行を単純化しようとしています、この地域におきましても、残念ながらそれほどビザの発行が容易ではないということがあります。それがやはり阻害要因になっていると考えます。

それでは、どうしたらいいのかという私の推奨事項ですが、もう少し調査が必要であると考えます。どれぐらい人々がお金を使っているのか、どういうふうなパターンで旅行しているのか、そして何を求めてといった、いろいろな局面についてのデータを集めるということです。各国の政府観光機関ですが、その数とそしてまた年齢等をつかむことによって、ユースツーリズムの数がどれぐらいであるのか、ボリュームの把握ができるように、そうした分類も必要であると考えます。そして、分析的なスタディーをするということによって、社会文化的なインパクトを把握することも必要であると考えています。

もう一つは、人々の意識の問題です。ユースツーリズムが地元のベネフィットにつながるのだというこ

と。また文化のつながり、国際的な理解の深まりに貢献できるということでもあります。そして地元の物を買って、そこからサービスを受けるということによって、その経済に貢献するということの認識も高まるべきだと思います。その意味で、やはり広報活動といったことが重要でありましょう。青少年のツーリズムが社会経済の全体的な発展に非常に重要な役割を果たしているのだということが認識されるようにしなくてはなりません。

また、青少年ツーリズムを明確に、その国の観光のマスタープランの中に取り入れていくということでありましょう。いろいろな国々のマスタープランがありますが、今のところ、そのいずれを見ましても、ユースツーリズムというものが掲げられていない。統合型のポリシーをつくるということでもあります。さまざまな省庁間のコーディネーション、連携ということも重要です。文化・スポーツの交流ということですが、姉妹都市間で行われるということがありましょう。そしてまた、二国間でとか、あるいは地域間でということがあると思います。

また、旅行に先立ってインターネットのウェブサイトで情報を得る人が多いと先ほど言いました。そうしたことに対応する努力が必要でありましょう。ヨーロッパにおきましては、ディスカウントのスキームが多いです。対象は青少年ツーリストであります。そうした形で安いホテル、そしてまたワーキングホリデーなどで迎え入れるということが必要でしょう。

青少年ツーリズムですが、我々の生活、そしてまた世界をいいものにすることができる、平和に対して貢献できる、そしてより美しい世界を発見してくれるのも彼らであると考えます。より多くの人たちがもっと旅行し、さらにほかの人たちを知り、発見し、そして自分自身を発見する旅を続けていってくれればと願うものであります。

講 演



「香港と日本の青少年ツーリズム交流について」

香港理工大学 ホテル&観光業管理学院 筆頭教授兼学院長

ケイ チョン



私は本日、青少年ツーリズムをどのように活性化するか、いわゆる教育面からお話したいと思います。

私はホテル&観光業管理学院を代表しており、この学院の学生はバランスのとれた技能の習得が必要です。3種類に分けると、まず、専門的な技能の能力が必要です。学生は卒業後、マーケティング、財務、人材、あらゆる意味での管理をしなければなりません。プラス、専門職としてこの観光業の運営、ホテル、ホスピタリティーなど、専門的な技能が必要です。さらにソフトスキル、いわゆる人間関係、コミュニケーションスキルも必要です。また、学生達はインターンシップを通じて業界での経験を実際してもらいます。国際性、そして多文化性の技能も大切です。ホテル、観光業管理にとってこれら3つの技能がとても重要です。

では、国際性、そして多文化性はどのように身につけることができるか、アプローチは3つあります。まず1点目は、国際性、そして多文化性の環境の中での勉強。3-4年、多文化の国際的な環境の中で学ぶと、自然に国際性が身についていくでしょう。2点目は、本日のセミナーの課題である海外旅行の機会を得ることです。海外に行き、多文化性の環境の中で、自分の社会だけでなく、外に出て行って仕事をする経験です。青少年にツーリズムは必要で、この旅行のための旅行、それから仕事のための旅行も必要です。

香港の場合、様々な機会、また興味もあると思います。例えば、学生が国際的な旅行ができ、オープンマインドなので、外国人恐怖症は学生の中にはない。香港は国際都市ですから、パスポートを持つ人口の割合は世界トップと言われていています。香港で赤ちゃんが生まれると、まず両親はパスポートを取ります。香港は小さいので常に旅行をしなければならない、海外に出ていくわけです。約70～80%の人達はパスポートを持っているので、国際的な経験を積むことができると

言えます。

もう一つ、英語が話せることが大きな利点だと思います。また、留学生に香港は様々ないい機会を提供します。つまり、英語で教育しているので彼らが香港で勉強しやすい。また、一般的に、旅行先として香港のイメージがとても良い、活気に溢れる街、安全だということ。しかしながら、限界や問題点も抱えています。最大の問題は、香港の教育制度です。柔軟性がなく、留学生がフルタイムで勉強できないことです。700万人の人口を抱えているのに大学が8校しかないの、制限されてしまうからです。日本では大学が220あると聞いています。比較すると香港は非常に限られ、全人口の4～8%しか留学生を受け入れられず、大学全体で4%の外国人学生しか受け入れられないのです。個別の学部では上限が8%、部門、学部によっては留学生を受け入れたくないところもあるでしょうから、こういう条件がついているのです。現在では220名の枠に3万5,000人が申請するので、倍率が約160ということになります。

この問題を解決するのに、学生交流という良い方法があります。香港の学生を受け入れて、大学レベルで交流させるのです。香港の学生が外国で学べて、外国人学生も香港にやってくる機会があるわけです。また、香港に留まる学生にとっても、外国人学生と一緒に勉強する機会が得られる。そこで、様々なアプローチを考えていて、例えば、国際的な教育、青少年の受け入れとして、まず学生交流です。

2点目は、地元でなく海外でのインターンシップです。夏期に全学生はインターンが必須なのですが、香港ではなく外国にも出しています。3点目は、研修として香港に迎え入れること。4点目は、学生を香港に連れてくること。また、「一日教授」という制度を設けています。それからもう一つ、学生の多くはインター

ネットを使っていますので「バーチャル教室」を設け、国際的な経験を可能にしています。この学生交流のプログラムですが、国際的な旅行、また香港に学生を受け入れるという意味で、青少年交流ができるのです。私どもから中国、カナダ、オーストラリア、フランス、フィンランド、韓国、ペルー、タイ、ニュージーランド、英国など、多くの国々に学生を送っています。このプログラムが7年前にスタートするまでは、海外で学ぶ学生は全くなかったです。現在はこれを活性化しています。この7年間に、計165名を海外に送り、172名を外国から受け入れています。この取り組みをしている国のなかでフィンランドが非常に人気で、香港の学生が55名も行っており、フィンランドからは44名受け入れています。同様に、オランダにも人気があり、その次が、英国、オーストラリアも人気があります。

日本では、立教大学と立命館アジア太平洋大学（APU）と提携しています。APUから6名受け入れ、私どもから3名を同大へ送り込んでいます。私どもの学生は、ある程度日本語を話す学生もいますが、日本語での授業は受けられないため、全コース日本語の立教大学では言語の問題があり、英語で受講できるAPUに送っているわけです。

学生交流でまず不都合な点として、始業時期の違いがあります。香港は2期制で、第1期が9月1日から、第2期が1月半ばからスタートなので、大学間の交流のためには、同じ季節、もしくは同じ期制でやらなければなりません。大学によっては8月にスタートして7月に終わるところもあり、12月から4月の間は何かもないということになってしまいます。また、カリキュラムに同等性がなければならず、うまく合わない問題もあります。

3点目は、目的地のイメージ。安全であるか、生活費はどうか。学生にはチャンスとしてヨーロッパに人気があります。ユーロバスでヨーロッパ全体を1-2カ月旅行したいと思っており、目的地としてのイメージはとても重要です。

4点目は、言語のコンパチビリティがあるか。英語が使えるかどうか、共通言語がどうかということ。

香港では中国語と英語の両方話せますので、英語で受講でき、台湾と中国ではマンダリンで受講できます。

それから、文化のコンパチビリティ。異文化の中で居心地がいいかという点。それから、海外インターンシップ、これは第2点目の方法ですが、国際的企業とパートナーシップを結び、香港に支店があるような企業へ私どもの学生を送り込み、そして外国に送って、例えば夏の間、国際的な経験を積ませて頂くといったことを行っています。このようなやり方は、青少年ツーリズム、また国際教育の一つだと考えています。学生たちは観光業や、ホテル業界の中で様々な運営を見るのですが、通常は6月～8月あたりの夏期、あるいは1年間のプログラムもあり、海外への研修旅行もカリキュラムの中にあります。多くの授業のなかで、海外に出ていくプログラム（ドバイ、エジプト、ハワイなど）を作り、いわゆる観光業（ツーリズム）のコンセプトを理解してもらうようにしています。女性グループが韓国チェジュ島に行き、約94名の学生が参加して会議運営のコースを勉強してきました。チェジュ島、プサン、ソウルなどのコンベンションセンターに行きました。また空港運営のクラス、香港では雇用の機会がある空港管理、航空管理の学科もあり、いかにベストプラクティスは何かを学べるようになっていきます。

また、文化的観光も行っています。海外旅行の費用は高いので経費の約60%は大学側で支援し、40%が学生の自費です。

それからもう一つ、政府の支援を受ける非常に面白いプログラムがあります。香港を様々な国の若者達に理解してもらうため、香港観光局（HKTB）が青少年ツーリズムを推進しています。数年前、香港観光局がウェブサイトでプロモーションし、エッセーコンテストを行いました。韓国の学生に香港のイメージについてエッセーを書いてもらい、そのうち50名のベストエッセーを書いた学生を選んで賞を与え、彼らに無料の香港旅行をプレゼントしました。その旅行には教育的な要素、文化的な紹介も入れております。一日私どもの大学にも来てもらい、1対1でうちの学生が各学生に同伴する形で、非常に効果的に交流ができた

考えています。同様に香港観光局がアレンジして、東京の私立学校でトラベルジャーナルグループのホスピタリティツーリズム専門学校から2006年に60名の学生が、2007年には62名の学生が香港にやってきました。一日私どもの大学にも来られ、全体で4-5日のプログラムで、香港の観光、文化を学んで頂きました。こういったアプローチはとても有効だと考えています。

それからもう一つ、現在模索中ですが、国際的な大学の学生達対象のフィールドトリップです。米国、韓国、日本の3カ国の学生対象で、各国の大学において単位が付く香港でのスタディープログラムを企画してもらい、約30～40名の学生に2週間来てもらうのです。また、この機会に香港理工大学の教授による授業も行いました。

私どもが展開する非常に興味深いもう一つのプログラムは「一日教授プログラム」です。国際的な側面を教育面でも促進したいと考えており、政府の高官や海外の方たちを招き「一日教授」になって頂くのです。「ゲストスピーカー」は非常によくあるので、もう1ランク上げて、一日教授としました。一日教授と呼ばれますので、非常に格のあるプログラムと考えられ、記念楯を贈呈することからもとても誇りに思っているそうです。このプログラムはとても成功しており、香港の観光大使であるジャッキー・チェンにもなって頂きました。彼のレクチャーは順番待ちでクーポンを発売したほど本当に人気があり、また日本や韓国からファンも聴講に来ました。彼には単に一日教授だけではなく、我が大学の名誉教授になって頂きました。これはいわゆる講習だけで支払いはなく、講義と、学校のスカラシップのための基金集めへの協力、これら2点を約束してもらいました。「ジャッキー・チェン教授との夕べ」というガラディナーを香港のインターコンチネンタルホテルで主催し、基金集めをしました。彼個人の持ち物をオークションに出品くださり、一晩で300万香港ドルを非常に効果的に集めることができました。いつも学生に教えていますが、創造力がとても重要だと思います。創造的であれば、様々なことが

できて新しいアイデアも生まれます。このイベント後、ジャッキー・チェンは、私を自宅での夕食に招いてくれました。贈り物として「名誉教授 ジャッキー・チェン」と書いた名刺を差し上げたら、喜んで頂きました。これまで5,000枚以上刷っており、彼にこの名刺を渡して頂くようお願いし、大学のマーケティングにもつながっています。彼は1年に一、二回しかいらっやいませんが、名誉教授のオフィスを設置しました。彼のオフィスを見たいという人がいて、観光スポットにもなっていて、彼のファンも来るので、お土産に彼の名刺を差し上げています。

他にもエピソードとして、2年前、ジャッキー・チェンをUNWTOアジア・太平洋地域の大使に任命しました。

昨年、どうすれば国際的な青少年ツーリズムを活性化できるかと、バーチャルな環境をつくっていかうと考えました。現在の若者は、我々が学生の時代とは学習方法が全く異なり、机もなく、ベッドに寝転がってiPodを聞き、テレビを見ると同時に、コンピューターを使いながら勉強しています。いかに若者とコミュニケーションをとるかを考えなければならないということで、バーチャルな環境をつくりました。その中で、日本、韓国、オランダ、アイスランドの人たちと会えて、お互いに交流でき、共同の研究課題も可能です。現在、約1,000万人が参加してこのバーチャルな環境を楽しんでいます。2011年には全てのインターネットユーザーが何らかのバーチャルな世界、セカンドライフを活用すると言われていました。香港、英国、オーストラリア、その他の国の学生たちがリゾートアイランドをつくりました。人工的な、現実には存在しない島ですが、その中にホテルと会議場をつくり、共同事業にしたのです。例えば施設の計画、設計、リゾートスパの管理や、会議運営、カスタマーリレーション、そしてマーケティング、これは非常に効果的です。実際私が高校生だった頃、ペンパルという文通相手がいって交流していたのですが、現在ではバーチャルワールドを活用することで昔のペンパルのような活動ができるわけで、そういう意味での青少年ツーリズムを活性

化することもできるでしょう。

大学としては国際的な教育や、青少年ツーリズムを活性化するために、やはりその教員陣も国際性がなければなりません。SHTM（ホテル&観光業管理学院）は18カ国から教員が60名以上いて、非常に国際性があり、私たちは恵まれていると思います。

そしてプロモーションもかけます。私どもはホテル&観光業の学校として世界でナンバー4、アジア・太平洋地域ではナンバー1です。これが新聞で報道されました。世界でナンバー1になるにはどうすればいいかとよく聞かれますが、学校所有のホテルが必要だと答えています。バーチャルホテル、実際のホテルではないですが、これを一つの土台として、教育をさらに進めていきたいと考えています。現在建築中で、2010年にキャンパスの隣にでき上がります。教室とラボ、オフィスもあり、278のデラックスな部屋、レストランは3つあります。それからハウスオブイノベーション（新しい技術を取り入れたようなショーケース）。非常に有名なバニヤントウリーのスパもつくります。バニヤントウリーが経営してくれます。会議場、ボールルーム、さらにサムソンのデジタルラボもつくる予定です。

私どもが実行していかなければならない点ですが、国際的な青少年ツーリズムは、政府あるいは大学という観点からではなく、さらに幅の広い、より国際的な教育という観点から見ていくことが必要だと思えます。それを可能にするため「創造性」がカギになると思います。つまり、箱から出て考え、バーチャルなところからやっていかなければならない。そして、学生が国際的な側面をより勉強できるよう、様々なことを試さなければなりません。私どもの教員陣も、国際性をさらに促進するために国際的でなければならぬと考えています。

ご清聴ありがとうございました。

「韓国と日本の青少年ツーリズム交流について」

アジア太平洋観光学会(APTA)会長、ドンア大学 国際観光学部 教授兼観光研究機関所長

イム サンテク



青少年のツーリズム交流ですが、私はYTEとしておりますが、調査をしていきますと、傾向としていわゆるプライベートベースな交流、ツーリズムというのがより活発であり、さらに、政府主導型のツーリズムがそれほど多くないのはなぜかということ調べてみました。

韓国でのYTEの定義がありますが、韓国政府は、青少年ということを15歳から24歳というくりに再定義いたしました。UNWTOは16歳から29歳で少し異なっています。

また、青少年のツーリズム交流ですが、これは非常に広範、包括的でまた複雑なエリアで、トレーニング、そして交流、文化的活動、これを若者のエリアというふうに定義づけています。すなわち、大半のこういった活動が、いわゆる観光交流ということになるわけですが、さまざまな種類のYTEが存在いたします。例えば、学校ベースのもの、学校・教育ツアー、あるいはフィールドトリップと言われるもの、そういった交流ということですが、また、国際的な組織ベースとなります国際交流プログラム、あるいは交流トレーニングプログラム、あるいは産業界と大学とのリサーチプログラム、またプライベートでいきますと、バックパックスのツアー、言語教育ツアー、ワーキングホリデーツアー。グループとなりますと、ファミリーツアーとか、スモールグループツアーといったものが考えられると。

青少年のツーリズムポリシーということで、両国間を考えてみました。

韓国の場合には、保健福祉家族省があります。また2種類の政府レベルの特別な委員会があります。それによって、青少年のツーリズムを促進しようというのですが、まず一つが、青少年保護委員会というのがあります。もう一つが、全国レベルの青少年委員会と

言われるもので、主たるタスクは、国際化また情報化時代に向けての能力を高める、開発をする。もう一つのタスクが、福祉と自己の主体性を開発するためのサポートをするということになっています。そして、このような目的を達成するために、幾つかの重要なYTEプログラムというものがつくられています。それは主に、例えば日本あるいは中国の青少年との友情を高めるための出会いですとか、もう一つ強調したい点は、すなわち、3カ国、日本、韓国、そして中国がいかに重要であるかということです。この3カ国ですが、非常に類似性があります。非常に距離的にも近いわけですから、ほとんど国内旅行と変わりません。そしてまた、我々の考え方というのも非常に似ていると思います。ですから、共通したところがこの3カ国の間にはあると思います。

そういったことが大きな理由となって、韓国の若者が日本、中国に行くという人気があるわけで、より新たな世代の一つの大きな傾向となってきています。また、韓国政府は、コリアンユース・トゥー・ザ・ワールドということで、世界に韓国の若者が出ていくようにということで、毎年全世界に若者を送り出しています。

さて、一つのケースですが、日本の高校生を韓国に招待いたしました。約150名の学生がやってきて、そして文化交流、あるいは韓国の食事をつくるというようなことを楽しみました。テレビのニュースで放映されたものでありますが、このストーリーには両面があります。一つがいい部分。もう一つが悪い面です。

いい面といますのは、ニュースでのビデオファイルが非常によい証拠になっている。すなわち、韓国と日本の政府が青少年の交流ツーリズムを高めるために、どれだけ努力しているかということがわかります。悪い面といますのは、ニュースに取り上げられたと

いうことは、余り頻繁に行われているイベントではないということです。そういった意味で、もっとこういった交流は広げるべきだと思います。

日本政府は非常に興味深い国際的なプログラムを進めています。2008年8月、「アジア青少年交流プログラム in 沖縄」というものが行われました。主要なこの中で活動といたすのは、環境問題、あるいはサンゴ礁の勉強をする、ディスカッションをする、科学者と会う、また研究開発施設などを訪れたり、ホームステイをするということです。言語は英語ということで、日本政府の内閣府が主催しました。これは非常によいプログラムだと思います。将来的にこういった交流を高めていくことができればいいと思います。

さて、2007年の段階で、韓国のデータですけれども、YTEという観点から見たら、どのような国際的な関係があるかということですが、トータル27カ国とMOUを韓国政府が取り交わしています。日本は受入れ、また訪問、そしてトータルにおいても一番です。1987年に日本政府とMOUを交わしました。これはYTEに関してです。20年以上たって、まだ1,300名以下しかないということで、この2カ国間の関係を考えますと、非常に数が少ない。これは政府ベースのものであって、もちろん何百万という人たちがプライベートでは動いているわけですが、正式な政府レベルでの招待、また訪問ということになりますと、1,300名以下ということになるわけです。第2番目が中国です。大体1,000名。こちらもがっかりする数字で、もっともっと数をふやさなければなりません。ロシアはもっと数が少なくなります。フランスですが、全くこれまでMOUを交わしてから、一切そういった意味での数字がありません。インドの数字も非常に小さいということで、また残りの22カ国ですが、非常に数が少ないということになっています。

さて、日本人の方が昨年200万以上の方が韓国に来られています。韓国に来られた目的ですが、4万人の方がスタディーツアーということです。将来的にこの数字がもっとふえればと願っています。

では、韓国の学生たちはどこに行くだろうかという

ことを調べてみました。まず1番が中国で44%です。そして2番目が日本で38%ということで、またここでも中国と日本が非常に大きな、関心のある国であるということがわかります。では、日本の学生はどうでしょうか。オーストラリアがまず1番、韓国が2番、そして3番目が、カナダも含めた北米です。日本の学生さんたちは、目的地を選択する上で、少しばらつきがあります。

では、なぜ韓国の学生は日本に行きたいのかということですが、まず第1番の答えは、自分たちの国際的な視野を広げたいということ。そして2番目が日本語を勉強したい、日本語を勉強するというのが、非常に韓国では今流行しています。もし韓国で流暢に日本語をしゃべれば、よりよい仕事につくことができるのか、いわゆる韓国での成功が保証されるということで、日本語を勉強するということが非常に重要なのです。

英語が一番で、日本語、そして中国語というふうに、若い韓国の世代の学生たちは、一生懸命外国語を勉強しているわけです。

日本の学生たちはなぜ韓国に来るのかということですが、すけれども、1番目に国際的な視野を広めたいということ。それから、いわゆる韓国の文化を理解したいというのが2番目に大きな理由です。非常に韓国と日本では共通項がたくさんあります。

また、歴史的にも、文化的にも数多くのことを日本と韓国では分かち合っているということ。そういった意味で、韓国の文化を勉強したいという理由がありません。

韓国政府が、韓国、日本のご両親に対して、YTEについて質問をしました。何が心配ですかということ。一番心配するのは勉強のスケジュールだと、スタディースケジュールを心配する。すなわち、例えば子供たちを韓国、あるいは日本にやるということになりますと、学校の授業に出られない。それがちょっと困るということですね。例えば韓国と日本、大学に入ろうと思えば、非常に競争が激しいわけです。ですから、そういった意味で、12年以上一生懸命勉強しないといい大学に入れない。ですから、両親として

は、子供たちに例えば一日でも終日どっかに行って遊ばれては困ると。そういった意味で海外に子供たちを送ることに對して、一番懸念するのがこれです。

2つ目が、言語の壁です。それから、やはり経費、お金がかかるということを心配している。安全性とか環境に関しては、おもしろい結果が出ています。韓国の両親というのは、日本のご両親よりも環境のことを心配している。これは私の個人的な解釈ですが、恐らく、非常に急速に日本の社会がいわゆる西洋化してきていると。子供たちが突然西洋化して、西洋文化に触れて戻ってくるのを怖がるというところがあります。それから、安全性ということに関しましては一番気にするところです。そういった意味で、非常に興味深い調査結果が出たということです。

もう一つ、非常に興味深い最近のプログラムをご紹介します。これはYTEに関するものですが、YTE以上のものと申し上げたいと思います。

2カ月前であります、韓国政府とアメリカ政府が合意をいたしまして、いわゆるMOUを確立しました。このプログラムの名前がウエストです。Work、English、Study、Travel、それで「ウエストプログラム」といい、来年からスタートいたします。5,000名の韓国の若い大学生を選びまして、アメリカに送ります。18カ月です。6カ月英語を勉強してもらい、そして6カ月インターンシップ、そして6カ月を旅行ということです。政府がそれをサポートするというものであります。このような「ウエストプログラム」というのを日本ともできないかと考えております。非常におもしろいことになるのではないかと思います。もちろん、家族の問題があります。また、4つの問題があると思います。

1つは、システム面での問題領域。すなわち、YTEに関して体系的な管理体制が整っていないということです。それから、プログラムの面で言いますと、年齢、グループ、あるいは性別によるプログラムの差別化ができていないということ。1つのプログラムしかなくワンサイズフィットオールということで、やるか、嫌だったらやめなさいというふうに1種類のプログラム

しかないということですね。特に、若い世代においては、余り魅力を感じられないだろう。それからまた、特別な管理体制がありません。例えば、管理するところにお金がないということですね。それから、彼らは余りお金を出したくない。YTEというのは収益を上げるプロジェクトと考えていません。すなわち、YTEはいろいろ経費を支出するプロジェクトだというふうに思っているのですが、これは非常に大きな問題であります。

インフラの分野に関しましても、例えばインターネットの情報が欠如しているという問題です。特に若い世代はバーチャルな環境に関してはエキスパートであると。しかし、YTEのマネジャーレベルの人たちがコンピューターを使えないということで、大きなギャップがあります。よりバーチャルな情報を提供しなければなりません。よりインターネットに関連したマテリアルを供給しなければ、彼らは興味を失ってしまうでしょう。

最後に提言です。まず、体系的な安全な管理システムをつくる必要があります。品質と量の両方を考えなければなりません。「WJST」はどうでしょう。Work、Japanese、Study、Travelということで、「WJST」というのを提言したいと思います。これは恐らく、若い世代の両国間の方々にとっても、非常に興味深いことができるのではないかと思います。

「タイと日本の青少年ツーリズム交流について」

タイ政府観光庁（TAT）政策・計画局 市場データベースグループ部長

スワット・ジュタコーン



昨年、2007年は日タイ修好120周年でした。両国関係、そして、青少年交流に話を進めたいと思います。青少年ツーリズムのどういうことが問題なのか、全ての問題解決には何をすべきか、また、ツーリズムを通じて問題を解決できるのか。

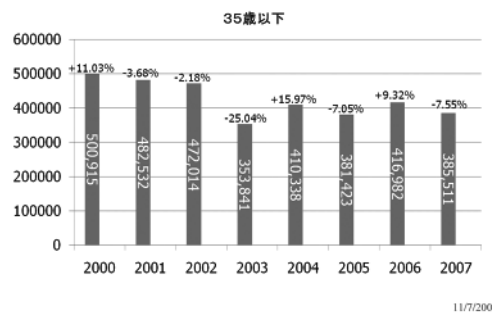
まず両国関係ですが、600年以上の歴史があり、スコタイ王朝時代からタイと沖縄の商人同士の間で交易がありました。その後、アユタヤ王朝を迎え、日本村ができました。当時の日本の傭兵長が山田長政でした。彼はタイのソントム国王から榮譽号を与え、オークヤー・セナーピムックと呼ばれる軍司令官の立場をもらいました。その後、ナコーンシータマラートプロビンスと呼ばれるタイ南部州の知事になり、現地で亡くなりました。また、ラマ5世(幼少時の名前:チュラーロンコーン)は、1868年に明治天皇と両国関係を結び、1887年に国交が始まったので、昨年は日タイ修好120周年でした。

さて、JICAを通じて両国間で様々な関係がありました。また、アユタヤの日本村には、江田五月参議院議員が昨年訪問しました。

両国間のツーリズムの状況について、国民の数、また経済の観点から分析してみました。2000年～2007年頃、様々な状況の変化や問題もありました。旅行者数の増減はありますが、両国関係が緊密であることに変わりありません。

既にプロモーションは若い世代向けのものを実施していて、タイ政府観光庁は、最初に東京、次に大阪、3番目に福岡と、日本に3つの拠点があり、若い学生たちを東京にということで、教育旅行を組織していました。今度は逆に、約500名の学生が日本からタイを訪問し、首相府を訪れたり、多くの重要な観光拠点を回ったりするプログラムを行っていました。

タイを訪れる日本人観光客



日本からタイへの35歳以下の観光客は、2000年に約11%増大し、その後下降に転じています。2004年に一度復活して15%伸びましたが、その後また落ちています。2006年に約9%増大し、昨年マイナスに再び転じ、今年も少しマイナスに転じています。日本人旅行者の74%が男性なので、プロモーションの方策を変えるべき理由になるかもしれません。もっと、ファミリーでタイを訪れてほしいと思います。35歳以下は30%を占めています。そしてリピート率は、2回以上が64%。自分たちでアレンジしたのが60%。約80%が休暇で、14%がビジネスです。また、かなり長く約1週間はタイに滞在します。観光支出は一人約130ドル/日です。

ツーリズムですが、文化ツーリズムと、それ以外にグループ分けすると、まず文化を中心にしたツーリズムですが、昨年は日タイ修好120周年を祝いました。それを記念し、上野動物園にサラタイというタイのパビリオンがつけられました。

タイの女性作家が書いた非常に有名な小説『クーカム(永遠の愛)』があります。邦題は『メナムの残照』で、第二次世界大戦中にタイ人女性と日本の軍人との間に恋が芽生えたというストーリーです。

第二次世界大戦前の1939年に「花屋」という日本

料理店が森園氏によりタイで開かれました。タイで最も古い日本料理のお店で、三代目の綿貫賀夫氏が今も経営しています。オーナーの娘だった森園康子さんと綿貫孝さんのご子息です。

また、重要なのは、日本でも120周年を祝い、その記憶を新たにしようという動きがありました。その記念に、アユタヤの日本村に日本庭園が造られました。その庭園の門は、金閣寺の門に似せています。西ノ屋形の石灯籠が建っていて、高い竹のフェンスで囲まれています。白い砂利が敷き詰められた石庭や、茶室もあり、茶室に入るための手水鉢も設けられています。また、この庭を守る守護神を表す13層から成る石塔があります。日本文化をこの庭園を通じて紹介しよう、そして、平和な世界の到来を願う気持ちを込めたものでした。シリントーン王女が8月に行われたこの庭園の開設式に御出で下さいました。

タイ政府観光庁は福岡にもオフィスがあり、タイの学生たちとアレンジして、福岡の学生がタイに行き交う交流も行われており、25名のタイの学生と4名の先生が福岡に来て、ホームステイをしました。逆に、2007年～2008年には、40名の福岡の学生がタイに行きました。大阪のオフィスでは、多くのセミナーやプレゼンテーションが行われました。

日本政府のサポートが非常に重要だと思います。つまり、日本へのビジットプログラムですが、2007年～2008年、トリップトゥータイランドという形で行われています。そして800名以上の学生が大阪オフィスのもとで組織されて参加しました。そして、2カ月間、船に滞在して毎日多様な活動により文化交流をする。そして、互いの生活様式を学び合う、様々な考え方を公開しようといったディスカッションもされます。船で東南アジアの各国を回っていきます。この若者たちは国の将来を担う人たちだと考えられていて、1974年から今日まで続けられている取り組みです。

また、JICAの中根敬一氏がタイ・プーケットに赴任されて、今もそこで仕事をされています。彼は剣道クラブをプーケットで設立され、そのクラブは国際剣道連盟に1991年に加盟しています。

さらに、日本政府の支援を受け、リンデンと呼ばれるバンコクの首都圏にも青年のためのスポーツセンターができました。スポーツ、アート、カルチャー、トレーニングセンター、さらにまた、ユースセンターのオフィスもそこに設立されました。柔道、空手など、多くの日本のスポーツがタイではとても人気があり、よく知られています。私が高校にいたときは、空手を勉強しました。逆に、タイボクシングは多くの日本人によく知られていると思います。また、刀剣を使つてのファイティング。タイ古来からのものですが、そのトレーニングセンターがアユタヤの寺院の一つにあります。過去アユタヤ王朝で、王に仕える騎士たちの訓練が行われたところでした。このように、既にそういった交流はされているということが言えます。

日本のゴルフをなさる方たち、タイをお好きだと思います。料金が安く、予約も簡単です。タイ全国で100以上のゴルフコース、バンコク付近だけでも約30コースあります。ゴルフコースは非常に設備が整い、日本語を話せる優れたキャディーもいます。

2010年のチャレンジということで、日本旅行業協会では「ようこそ！ジャパン」という2010年に1,000万人のインバウンドを目指すことを考えています。ターゲット市場が北米、ヨーロッパ、オセアニア、アジアです。また「ビジットワールドキャンペーン」では、2010年に2,000万のアウトバウンドを目指しています。将来のトレンドを考えてみると、20代、30代がターゲットとなっています。目的地にぜひタイを選んで頂きたい。ASEANのなかで、タイだけ9カ国中に選ばれています。関西、中部、それらの地域の再活性化という戦略にもつながります。また、メディア戦略ですが、20代、30代の若い人たちのために研究開発、ジョイントプロモーションが必要でしょう。そして欧州、米国本土でそうした戦略的な形で、ダイレクトマーケティングを展開したいと考えています。

さて、PATAでもアウトバウンドに注目しています。今、日本人は財布のひもを強く引き締めて支出に敏感になり、昔ほどお金を使いたがらなくなっている。アメリカ発端の経済危機が全世界に波及している影響で

しょう。今は景気後退の局面に入って、さらに金融、政府に多くのスキャンダル等もある状況です。従って、国内旅行の方が魅力的と言えるかもしれません。経済開発では、アジアは非常に緊密な協力関係があります。国内旅行ですが、もちろん海外旅行と比べて魅力がありますが、タイ人の場合には、国内旅行を個人とするより海外へのパッケージ旅行の方が安いので、海外の方が国内よりまだ魅力的です。

さて、若い旅行者に何が一番いいのか。交流ですが、質の高いビジターが将来増加するようにしなくてはなりません。2000年には若者の数が増えましたが、その後、下降に転じたのは、教育旅行をやめた時代があったからだと思います。ただ、今年、10年経って、また若いエグゼクティブ、指導や経営等に携わる人たちがお金を持ち、旅行するようになり、若いときに訪れた地にもう一度行こうという時代に入ったと言えるでしょう。

さらにPATAでは、各国観光庁の様々なコーディネーションを期待しています。ホテル、航空会社、特に東南アジア関係では、ジョイントプロモーションのために、互いに力を結集しようということだと思えます。

若者達のツーリズムですが、コーディネーションをより緊密にして、官民が協力することが重要だと思います。本日のセミナー講演者の方々のお話のように、両親のフルサポートを得られることも重要だと思います。さらにまた、TTIによる2010年予測で、長距離旅行の送客市場ランキングで米国が第1位、日本は2位ですが、今後の情勢を見る必要があります。山川さんのお話のように、格安航空会社の台頭で、この予測は変わってくる可能性もあると思います。

さて、マスターカードの予測によると、アジアの目的地は二桁成長するとされています。景気後退の局面があってもですが、アジアはそれほど大きな影響を受けないであろうと。金融、経済危機が米国発で世界に広がっても、何とか耐えていけるということです。今年12月までに、アウトバウンドは8,830万人に達すると予測されています。

マスターカードのランキングによると、2008年下期の日本発アウトバウンドは920万人です。タイ発は210万人（約10%増）。日本はもともと数値が大きいので、比率としての上昇値は小さく2.8%増です。我がタイ国政府観光庁は関西のマーケティングスチューデントと様々な協力活動をしています。2,754名の学生がファミリーアライゼーショントリップに参加してタイに行きました。

来たる2009年2月に、またそうしたプロジェクトを企画しています。関西大学で選ばれるミスキャンパスの勝者の方々が招待されて、タイを訪問します。そして来年7月、関西外語大で約200名の学生がビジットタイランドというプログラムを組んでいます。また、大阪教育委員会も、さらに教育的なプログラムをということで、15名の高校生、先生方がビジットタイランドのプログラムでタイを訪れる予定です。また、ミーティングやディスカッションをしたり、ボランティアによる様々な交流プログラムが日程は未定ですが組まれています。また、文化交流ですが、例えば、ナコーラーチャシマ（タイ北東地域の一つの県）でタイの生活様式、世界遺産、ホームステイ、タイらしさを実感、体感する、経験すること。また、特別なミッションとして、大阪オフィスが特に力を入れているのが、ゴルフキャンプです。若者達がタイでゴルフトレーニングを受ける。エコツーリズムもありますので、日本の若者達にぜひ参加してほしいと思います。様々な考え方の交換、あるいは活動を互いに分かち合うことで、タイの若者達と接点を持つことができます。また、ほとんどのタイの大学には国際部があり、英語を教えている、英語を話すコースがあります。チョンブリ、パタヤなどで行われています。

さて今後、将来の交流をさらに深めるため一体何をすべきか、私自身、観光に関する人材づくりのネットワークであるAPETITの設立に関わった人間なので、この交流プログラムをさらに振興させ、文化・教育・スポーツの交流をもっともっと高めたいと考えています。そしてまた、コーディネーションをもっと強力にしたいと思います。

さて、いかにそれを実行するか、タイには約 100 の大学があります。日本とタイの大学、もちろん高校も含めていいと思いますが、互いに覚書を交わして姉妹提携すれば、交流はそれに基づいてより速やかに行われるでしょう。さらに民間、公的機関、政府もバックアップしてくれると思います。また、言語学習はとても重要で、ファミリーステイも重要です。AFS（アメリカフィールドサービス）がありますが、アメリカ政府が我々のほうに学生を送って、1 学期、あるいは 1 年間、滞在させるということをしています。それを日本とタイ間で AFS のようなものとしたらどうか。まずファミリーから、そして大学教授から最初にしてはどうでしょうか。非常にやりやすいと思います。

ただ、一つ問題があるとすれば、チョン先生がおっしゃられた言語の問題だと思います。インターナショナルということで行うのであれば、第一歩はまず英語で実施し、その後に日本語、そしてタイ語を入れる形式にしてはどうでしょうか。そして、両国間のツーリズムですが、もうかなり昔から歴史があるので、若い世代のツーリズムに関わる人たち、スタッフの交流をしたらどうでしょう。観光学の学生をジョブトレーニングという形でバンコクの JTB に送って下されば、そしてまた、全世界に展開している日航ホテルでのオンザジョブのトレーニングで、タイの日航ホテルに派遣できると思います。昔タイにあった日航ホテルは、その後オーナーが代わりましたが、日航ホテルのチェーンの中でコーディネーションはできると思います。

若い経営者、リーダーの人たちを両国の間で交流させたいと思います。若い経営者協会のミーティングがあり、タイと日本の若いビジネスリーダー達ですが、話し合っただけでアイデア交換をするのは重要です。ビジネスを一緒に始めるかもしれません。そうすれば経済の緊密なつながりがさらに進化すると思います。

こうしたことは非常に重要で、協力によって、あらゆる部門でとれます。特にフルサポート、若者達への家族のサポートです。場合によっては、テレビ番組の活用もあるでしょう。日本の「テレビチャンピオン」

のシリーズが、タイではとても人気が出ました。また、タイの「クンプラチュア」というシリーズ番組があります。英語で「オー・マイ・ゴッド」という意味で、昔のタイ文化を今日に伝える役割を担いました。歴史についても語り、その伝統についても人々に啓蒙するものでした。このような交流がテレビのシリーズでできたらと思います。若者達の交流がより速やかにでき、タイ人と日本人の間により深い理解が生まれると考えます。

今年は両国の修好 121 周年、皆様方に心からお礼申し上げます。130 周年を祝うときには、両国間でさらに若い世代同士の交流が高まっていますよう心から願っています。

ありがとうございました。

「オーストラリアと日本の青少年ツーリズム交流の取り組みと課題について」



立命館アジア太平洋大学副学長 マルコム・クーパー

ツーリズムの特性というのは、政府等の活動というよりは、観光者から言っても、消費的な、商業的な活動であるわけです。つまり、需要側から出てくる活動であるということが言えます。オーストラリア、ニュージーランドの例ですと、どれだけアクセスできるかということによって人数が限られる。それから、時間も限定要因として出てくるわけです。それと同時に、訪問をするというところがこれらの要因によって限定されるわけでありまして。オーストラリア、ニュージーランドでは、いわゆる魅力性ということ、そして青少年にとっての仕事を通しての魅力ということも言えるのですが、それについて話したいと思います。

ツーリズムは非常に大きなビジネスであって、目的地にとってはそれが経済的なベネフィットにもなり、社会的な貢献要因となるわけでありまして。収入源でもあるわけですが、強調したい点は、いわゆる旅費にかかるコストで、ほんのわずかがアトラクションに使われていることです。どこに行くかということでアトラクションが決まってしまうわけですが、その残りの経費というのは、交通費であるとか、宿泊費ということになります。ですから、青少年のツーリズムをニュージーランド、オーストラリアに限って言えば、バックパック旅行が非常に大きなビジネスになります。そうすることによって、経費をある程度削減することができるわけです。

オーストラリアでは青少年ツーリズムを理解するためには、バックパッカーともともとと同じだという点を十分理解しておかなければいけない。青少年というのは、こういった旅行が非常に形態としては多い。なぜならば、彼らの使える時間が原因であります。青少年は学校に4年間行って、そして直接仕事につくわけがあります。その間に少し休暇をとって何かしたいと。例えば、卒業後、3カ月、6カ月休暇をとりたいと考

えるわけです。ですから、パッケージで出かける人たちよりも時間があるということと金額としては6,000ドルぐらいになると考えます。もちろん、個人差があります。そして、楽しい経験をしたと思うわけで、私が指摘しておきたいのは、そのほかの経済活動と比べれば、旅行というのは、公的部分のリソースを活用することができるわけでありまして。特に、そこを理解しなければいけないと考えます。

そのほかの経済活動と比較をしてみたいと思います。特に青少年の観光といえば、公的な資産、例えば農業についても、オーストラリアでは、いわゆる農業部門、例えばアスパラガス、パイナップルを収穫する時期というのは労働力が必要です。ブドウもそうです。なかなか人が集まらない。特に、オーストラリアは都市部に住む人たちは、農業知識はなく収穫しようとも思わないのです。ですから、ツーリストである若い人たちは労働力になります。観光だけではなくて、そういうことに人材を活用できるという可能性もあるのです。

確かに、ツーリズムというのはエンターテインメントであります。特に若い人たちにはそうだと思います。アートギャラリー、それから美術館というのは、このことを理解しなければならない。つまり、自分たちはエンターテインメントビジネスをしているのだということを理解しなければいけないと思います。なぜならば、何か学習を深くしたいと思って美術館に行くような人たちは少ないのです。むしろ大部分は自分たちが楽しみたいと考えています。ツーリズムというのは基本的に、需要をベースとした活動であるということ。そして、バックパックの人たちは全くそのとおりでありますし、そのほかの形態の旅行者でもそうです。また、日本人でも、特に青少年は最近そうなってきました。パッケージツアーというのは、確かに重要な位

置を占めておりますけれども、パッケージ化しますと、例えばシドニーのような都市でのアトラクション、そしてその結果、経費は安くなるが、国全体を見れるということではないわけです。ですから、ほかと一緒に、日本の青少年といたしますと、オーストラリアに行くというとパッケージツアーでコストが削減できる。そして経費を抑えようとするわけであります。

ここで、この問題についてもう少し深く考えていきたいと思えます。日本人の青少年ツーリズムですけれども、最初は教育的な目的での旅行でした。これに関連してAPUについて話をしたいと思えます。APUには、ほとんどが日本、中国、そして韓国の学生でありますけれども、87カ国の学生がいるわけであります。そして、6,000名の青少年ツーリズムが集まっているわけであります。そして多文化性とか、国際性というアジアの青少年の経験について、APUキャンパスに来ていただければ、典型的にそういう経験ができるわけであります。また青少年のツーリズムが変化しているということを理解しなければなりません。例えば沖縄へ多くの地域の学校の人が行きますが、私どもの大学院生、学生は、こういったプログラムに8月、チューターとして参加して、仕事をしているわけです。

私のメインのトピックに戻りますが、少し前のことですけれども、オーストラリアの政府が労働力を見つけるためには、ツーリストがターゲットだと認識したわけであります。つまり、収穫を助けるような、そういった農業部門での人出です。そして、特に若い世代、例えばアカウンティングのトレーニング、そして職業トレーニングをするような人たち、シドニー、メルボルンなどに来ているわけであります。そして、ジョブサーチというウェブサイトがありますが、そこに政府が出したんです。若い人たちがオーストラリアの全土を旅行することができる。そして、ハーベストトレイル、収穫の地域をつないだ道をつくったわけであります。そこで多くのいろいろな国の人が集まってきて、青少年の旅行者を理解することができるようになったのです。多文化性であるとか、そして言語も練習する

ことができる。また、それに参加することによって、オーストラリア、ニュージーランドの地方を見ることが出来る。そして、そこを国際化することができるわけです。もちろん農業部門というのはかなり保守的であると思えます。しかしながら、こういうプログラムを政府が展開することによって、より若い人たちが出てきた。ということで、ワーキングホリデーであるとか、オーストラリアのプログラムというのは、みんなが参加できるのです。5年前まではいろいろな規制がありまして、自由に参加することができなかつたのですが、それが変わってきました。そして、ニュージーランド、オーストラリア政府がこれに認識を高めて、青少年のツーリズムを促進したのです。その結果、このプログラムは非常に成功していると思えます。

例えば、長距離やってくるヨーロッパの人たちは、こういったプログラムを活用して、自分たちの経費を削減しようと。オーストラリアで働いて、そのほかのアジア地域にも旅行を伸ばしたいと考えるわけであります。韓国、日本人の学生たちも来ます。これをやっているわけです。単に家族についてくる、あるいはパッケージツアーに来るというのではなくて、こういうプログラム、独自で自立をしてやっている。そして、それを好んでやっているようです。

それから、そのほか日本人の学生というのは、どちらかという、過去は教育目的でメルボルン、シドニー、アデレードにやってくる人たちがいました。それからケアンズでは経済的な要因というのが非常に大きかったわけであります。日本の旅行者の経済貢献というのが非常に高かった。ゴルフコースもそうであります。教育目的でやってくる。けれども、学生たちはホテルで仕事をしたり、またレストランで仕事をして、観光の知識をつけるのです。そして、オンザジョブトレーニングをするわけであります。つまり、これは日本の観光のサポートツーリズムとなっているのです。サービスの文化と、ケアンズであれば、日本の観光客が労働力となって貢献しているわけであります。ただ、主流といえ、先ほど申し上げた収穫に参加することなのです。

オーストラリアの学生について、少し見ていきたいと思ひます。困ったことに、オーストラリアの学生というのは旅行に行かないのです。自分たちが学位を取る間は旅行しない。しかしながら、学校主催の旅行に参加する人たちは最近出てきたのですが、ほとんどは自分たちが卒業するまでは旅行に出ないのです。最近、オーストラリア政府が、これはよくないと判断して、より教育目的のツーリズムを促進したいと考えたわけです。そこでオーストラリア政府が、少なくとも1年間支援をして、そして海外で大学に学ぶことができるようにしました。APUがそうですけれども、オーストラリア人の学生を外に出すと。これは長年、私どもがやってきたことですが、それをオーストラリア政府がやろうとしてきています。

APUでは、オーストラリアから学生が確かにやってきます。学生たちは旅行をよくしますので、我々がやっていることはまだ間違いではないと考えています。ただ、日本の大学に入るオーストラリア人をふやすためには、例えば、単位を提供するという必要も必要でしょうし、それから、政府間での協力が必要でしょう。そして、オーストラリア政府が支援をしているような形でもって、この両方側からの支援が必要です。もちろん、若いオーストラリア人で日本にやってくる人たちはいます。ほとんどは例えば標識であるとか、価格であるとか、旅行しやすいかどうかということに心配するようではありますが、「ようこそ！ジャパン」というプログラムが展開されてからは、こういう問題は少なくなってきました。

そして、受け入れ側の姿勢も重要だと思ひます。「ようこそ！ジャパン」のプログラムによって変わってきてはおりますが、オーストラリア人の学生は、どちらかというところ、年齢は高い。つまり、自分たちは卒業して、あるいは学位を取ってからやってくるわけで、それらの姿勢を変えるということはなかなか難しい。より早く、若い時代からもっと日本に来るように仕向けていかなければならないと考えています。

それから、学生交流のそのほかの形態としては、ジェットプログラムというのがあります。日本と英語

の教育にかかわるプログラムでありまして、オーストラリアの若い世代には人気があります。また、日本のNGO、NPOでの仕事をするということですがけれども、これは青少年の経験にとっては非常にすばらしいと思ひます。これはそのほかの地域にも、国にも拡大していきたくて考えております。オーストラリア、ニュージーランドの学生にとっては、とても有効だと思ひます。もし日本語がしゃべれれば、とてもすばらしい経験ができると思ひます。

日本は非常にすばらしい文化的な、また物理的なリソースがあり、オーストラリア人たちはそれを経験したいと思っており、そこは問題ではないわけですが。ただ、実際の問題というのは、やっぱり学位を取ってから来るという、そのずれなのです。ですから、大学のキャリアなどに関して、それから社会的なネットワークがそこでうまく対応できればいいなと思ひます。

それから、逆に受け入れ側、日本人の青少年を動かすのは、かなりやさしかったわけであります。最初は普通の旅行でやってきて、その後は自分たちの自立した旅行をしようということで、バックパッカーとして戻ってくるわけであります。オーストラリアで簡単に旅行している。日本人の学生というのは、非常に自立した形での旅行がふえていると言えらると思ひます。

「日本(関西)の青少年が求めるアジア・太平洋各国理解のためのツーリズム交流の形態」



阪南大学教授 前田 弘

私は、サステイナブル・ツーリズム(持続可能な観光)を研究しています。社会や環境の持続可能性をいかに達成するかは、今世紀の我々と次世代の人類に関わる大変重要な課題です。その意味でも、サステイナブル・ツーリズムは非常に重要ですが、その実践に関する考え方や方法はまだまだ研究の余地のある大変難しいテーマです。

さて、まず青少年ツーリズムとは何かを考えておきたいと思います。青少年は成長過程上の世代ですから、当然成長して大人になり、次世代の担い手となる、まさにサステイナブルな存在なわけです。すると、青少年ツーリズムとはツーリズムの持続性に関わることになりますから、まさにサステイナブル・ツーリズムだと言えるのではないのでしょうか。したがって、青少年ツーリズムは、今日の世界のツーリズムをめぐる大きな課題につながってくると思います。

ところが、青少年ツーリズムは、実態の非常に分かりにくいツーリズムです。私の所属する阪南大学の国際観光学科は、1997年に設立された関西初の4年制観光系学科です。1学年に約130人、全学年で約500人の学生がツーリズムを学んでいます。毎日学生と接していますが、彼らのツーリズムがどのようなものかは非常に分かりづらい。ただ、2つの傾向が言えると思います。

一つは、ツーリズムを学ぶ学生も、実際にやっているツーリズムは一般と変わらず、ほとんどがマスツーリズムだということです。彼らにとって現実には、安く予約が簡単なツアーをいかに探すかが最大の課題ではないのでしょうか。テクニックも必要ですが、こういったツアーを探すのはマスツーリズムのトレンドそのままであり、そういう一つの実態として、青少年ツーリズムがあるのではないかと思います。

もう一つは、大学教育の制度に基づく青少年ツー

リズムです。これは午前中の講演でもありましたように、留学制度や海外インターンシップです。今日、大学や場合によっては高校でも、そういう形が制度として非常に普及している、というのが青少年ツーリズムのもう一つの傾向です。

私たちの大学でも英語、中国語、韓国語圏を含め多数の大学と提携して留学を行っています。また、オーストラリア、イギリスなど英語圏では、インターンシップも行っています。日本の大学の現状では、留学の大半は英語圏での語学留学ではないでしょうか。中国語、韓国語圏が後に続いていると思いますが、国際相互理解や、国際交流の観点に立つと、語学留学は一部の狭い範囲の目的です。学生は入学当時から語学留学への意欲を持って、多くが1年か半年単位の留学をして満足していますが、それが青少年ツーリズムの全てとは言えないと思います。日本は、言葉の壁が非常に大きいので、留学のインセンティブとして語学習得がまず挙げられるのは仕方がないですが、ツーリズムを教える立場としても、大学における青少年ツーリズムは、語学主体の留学に偏りすぎている気がします。かつて私たちは、語学を学びたいというよりも、とにかくお金をかけず様々な国を旅したいという気持ちや行動の方が先にあったように思います。しかし、私が現実に学生と接する限りにおいては、なかなかそういう学生を見つけにくくなっています。ただ、彼らは語学留学だけ求めているのではないと思います。国際交流のチャンネルが、語学留学に限られている大学の制度的な問題があるのです。

青少年ツーリズムとして語学も海外インターンシップも必要でしょうが、それだけにとどまらず、現代の大学生もツーリズムに心から求めているものがあるはずで、そこで、そのような思いも込めて、青少年ツーリズムについて、私なりに定義しますと、それは、人

生の成長期において青少年に教育効果を与えるツーリズムだということです。大変幅広いのですが、その中でも特に、異文化理解や異文化交流という効果を特に求められるツーリズムが青少年ツーリズムだと思います。そして、語学留学にとどまらず、そのような効果をもつ幅広い青少年ツーリズムの形を普及させていくことが課題となるでしょう。

現代の主流のツーリズムであるマスツーリズムとは、サイトシーイングとアクティビティーで構成されたツーリズムといえますが、今の大学生を中心とする青少年が求めているのは、見るだけ、するだけではなく、それらを超えたものを求めているのではないかと考えています。それは、サイトシーイングとアクティビティーとはまた違う、「経験の価値」と呼べるものです。それは、見たこと、やったことが一続きの経験としてツーリストの記憶に残ること。これが今求められているツーリズムとして非常に重要ではないかと思っています。最近の経済学の分野でも「経験の価値」が重視されていますが、現代のツーリズムには、特に次代を担う青少年のツーリズムには、まさに同じことが言えると思います。

2005年にイギリスで私は「ツーリズムによる地域再生」をテーマに1年間調査したのですが、あるB&Bに泊まったとき、一人旅のイギリス人青年に出会いました。彼は、6～7歳の頃に家族と一緒にB&Bに来たという思い出、記憶をたどって、一人旅に出て、ここに泊まりに来たと話してくれました。つまり、その青年にとってツーリズムは、流行を追うよりも、家族と観光したという記憶のほうに重い価値を置いた、記憶をたどる旅だったのです。こういうところに、サイトシーイングとアクティビティーを超えた青少年ツーリズムの一つのポイントがあるのではと思います。

では、こういう「経験の価値」のあるツーリズムとは、どうやればできるのかを考えてみると、それには記憶に残る経験の場を作ることが必要です。その「場」とは、デスティネーションのコミュニティではないでしょうか。ツーリストがコミュニティの人たちといかに

交流するかに、青少年ツーリズムの意味があるように思えます。そして、その場合の青少年ツーリズムとは、コミュニティ・ベースド・ツーリズムだといえます。

コミュニティ・ベースド・ツーリズムとは、デスティネーションのコミュニティを場所として、コミュニティとツーリストの相互交流の行われるツーリズムです。その相互交流として、異文化理解、異文化交流が行われる舞台がコミュニティです。そういう舞台をつくっていくことが、青少年ツーリズム交流に非常に必要になってくるでしょう。コミュニティ・ベースド・ツーリズム、日本ではコミュニティ・ツーリズムと言われることが多いのですが、これはサステイナブル・ツーリズムの一つの形態です。サステイナブル・ツーリズムをデスティネーション、つまりホストの側から見ると、コミュニティ・ベースド・ツーリズムと言いかえられます。UNWTOの定義に、サステイナブル・ツーリズムは、コミュニティの社会的・文化的持続性、あるいはコミュニティの経済的持続性を図ることとあります。このように、サステイナブル・ツーリズムにおいて、コミュニティは非常に重要な要素になっています。そういう意味で、私は青少年ツーリズムのあるべき姿をサステイナブル・ツーリズムに求めています。

そこで、私が大学でサステイナブル・ツーリズムの教育の一環として取り組んでいるエコツーリズム実習の例をご紹介します。私は、大学でエコツーリズムの講義をしていますが、講義だけではその意味や問題点をなかなか実感させることはできません。そこで、2004年から毎年夏に、学生を連れてマレーシアのボルネオ島で7日間のエコツアーを実施しています。2002年に「国際エコツーリズム年」が制定され、その第1回記念大会がボルネオ島で開かれました。この頃をきっかけに、マレーシアはエコツーリズム立国、すなわちエコツーリズムによる国づくりを国家方針として打ち出し、エコツーリズムへの取り組みが増えました。私も、そのようなマレーシアのエコツーリズムの動きに同調して、日本のエコツアー専門会社との共同企画で、実習としてエコツアーを始めたわけで

す。

ボルネオ島の上半分にマレーシアのサバ州があり、その熱帯雨林の中央をキナバタンガン川が流れています。川の周辺は野生動植物の宝庫で、そこにはまた32の先住民族が暮らしています。自然と伝統的文化がキナバタンガン川周辺に展開していて、そこで私たちは、毎年エコツアーの実習をしています。ツアーの特色は、キナバタンガン川の流域に住む先住民族（マレー語でオランスガイ）の家でのホームステイです。

エコツーリズムには様々な形態がありますが、次の二つの分け方があります。一つは、ネイチャーベース（自然重視型）のエコツーリズム、もう一方は、コミュニティーベース（文化重視型）のエコツーリズム。エコツーリズムでネイチャーベースなのは当たり前だと思われるかもしれませんが、エコツーリズムは自然一辺倒ではなく、観光客の自然との接し方の違いにより、そういう分け方ができるのです。ネイチャーベースは、例えばガラパゴス諸島のように、ほとんど人の文化のないところで、観光客が自然と直に接触する。もう一方のコミュニティーベースのエコツーリズムは、地元コミュニティーを通じて自然と接触するということです。

特にボルネオ島のエコツーリズムの特色は、ホームステイによるコミュニティーベースが奨励されているので、まず先住民と一緒に生活をして、寝食を共にし、彼らと一緒に行動しながら自然を体験していきます。先に、「経験の価値」の重要性を述べましたが、この場合、その価値はホームステイという形式にあります。つまり、たとえば、単にリバー・クルージングで熱帯ジャングルの自然を見物するサイトシーイング、あるいは村中で何かを飲食するようなアクティビティーではなく、住民と一緒に生活する中で、日常のひとコマのようにサイトシーイングやアクティビティーをやっていきます。これは、ホームステイという交流の仕掛けをベースにすることで、サイトシーイングやアクティビティーといったツーリズムを経験の価値のある、心に残るツーリズムに変えているのです。

自然豊かなボルネオ島は、実は森林伐採が進み、そ

の後にパームオイルのプランテーションが盛んに行われ、原生的な自然が非常に少なくなっているのが現状です。それをくい止めるためにも、政府はエコツーリズムを推進しているわけです。私たちは、樹木伐採で森を追い出されたオランウータンの保護施設を毎回見学したうえで、ホームステイ先の村を訪れます。そうすると、村の住民たちは、エコツーリズムという言葉でなく、コミュニティー・ツーリズムという言葉でわれわれを迎えてくれます。私たちはツアーの初日から、ジャングルの自然を守るためにツーリズムによって自らの暮らしを変えていこうとする住民の強い熱意を感じるようになります。

学生が、こういうネイチャーベースのサイトで自然の豊かさに感動するのは当たり前ですが、実は彼らが一番感動した、あるいは好きになったポイントは、まさに経験の価値の部分、つまり「コミュニティーの人たちとどう関わられたか」ということです。ホストファミリーや住民との関係をベースに自然を見たり、楽しんだりする。コミュニティーをベースにして、学生たちはエコツアーを楽しみ、感動していることが非常によく分かります。中には、次年度の実習に同じ料金をまた払ってでも参加する学生が2-3人必ずいますが、彼らはそのエコツアーに経験の価値を認めているからこそ、再度参加するのではないのでしょうか。単なるサイトシーイングとアクティビティーだけで満足なら、おそらく1回で十分です。それが2回、ある場合には3回と続くかもしれないという持続性を保証しているのは、そういう「経験の価値」を生み出すコミュニティー・ベースド・ツーリズムの仕組みなのです。

私は、そういう体験から、青少年ツーリズム交流は、実はコミュニティーベースでやるべきではないかと考えています。実際、ツーリズムの世界ではすでに様々な形でそういう試みがなされていると思いますが、私が大学教育の現場で見る限り、そういったコミュニティー・ベースド・ツーリズムを青少年が体験することは、現実にはあまり取り組まれていません。これはツーリズムの価格とか、ビジネスも含めた様々なシステムの問題があるのでしょうか。それをクリアするのは

まだ大変難しいですが、青少年ツーリズムがサステイナブル・ツーリズムとなるためには、そういうバリアを越えていかざるを得ません。なかなか具体的な提案はできませんが、一つは、それにはツーリズム産業だけが取り組むのではなく、産業の側、民間部門、コミュニティ、そして行政・政府、そういった多様なセクターが互いに協力して青少年ツーリズムを生み出していく仕組みがぜひ必要です。それも、ツーリズムなのでから国際的な仕組みです。ぜひともそれに取り組むことです。

今や、日本やどこの国の学生でも比較的楽にマスツーリズムの商品は購入できますが、例えば、パソコンのワンクリックでそのような青少年ツーリズムも購入できるシステムはまだつくられていない。少なくとも日本の学生を見ていると、「経験の価値」を求めるコミュニティ重視のツーリズム交流へのニーズはあると思いますので、直ちにシステムの構築に乗り出さなといけない。ということ、日本からと言うと大げさですが、青少年たちの学ぶ大学の現場から問題提起させていただきます。ありがとうございました。

「訪日教育旅行における学校交流の現状」

財団法人大阪観光コンベンション協会 学校交流コーディネーター(特命顧問)

湯浅 勝史



大阪観光コンベンション協会は、大阪府、大阪市及び民間が出資、人材派遣をし設置されました。大阪に海外あるいは国内から人を呼び、大阪の活性化することを目的とした財団法人です。大阪城や大阪市内にある5カ所のインフォメーションも大阪観光コンベンション協会が運営しております。無料の観光地図等も大阪観光コンベンション協会で作成しております。天神祭も共催しています。いろいろなところで観光の下支えをしながら、観光客やコンベンションを大阪に呼び入れている財団法人です。

きょうは、訪日教育旅行と学校交流、学校交流の意義と評価、学校交流の実際、学校交流の課題と対応、の順でお話をさせていただきます。

まず、訪日教育旅行と学校交流ですが、近年、大阪だけではなく他の府県も、訪日教育旅行者の受け入れが増加しています。当然、経済的な効果は高いのですが、それ以外に、海外修学旅行は大阪から海外に行く場合と同様、学校交流によって海外修学旅行の教育的価値を高めることも重要となっています。増加している教育旅行者のニーズに応えながら、これからは受け入れ校にとっても学校交流をいかに意義あるものにするかが問われています。

訪日教育旅行者が増えているのは、海外での富裕層の増加、教育旅行に限ってビザなし渡航が韓国、中国、台湾で可能になったからです。他に、日本文化への憧憬ということも挙げられます。例えば漫画に代表されるようなもの、あるいはファッション、また進んだ日本の教育に接してみたいという気持ちもあるでしょう。更につけ加えますと、安全である、清潔である、そういう日本に来たいという若者のニーズも強いと思います。

訪日教育旅行と日本の修学旅行の違いですが、日本の場合、修学旅行は一個学年がほぼ全員参加します。

一方、訪日教育旅行の場合は、人数が限られ希望者だけが来るというところに特色があると思います。少人数の希望者ですから、小回りがききます。小回りがきくということは立案が遅くても間にありますから、学校交流の申し込みが遅く、1カ月から2カ月前に斡旋をしてくれませんかというような申し出がほとんどです。

大阪府内の受け入れですが、教員の視察も含めまして、昨年度約1万1,000人が来られました。受け入れ校が延べ257校、これだけの学校が海外から来られます教員・生徒に対して門戸を開いているわけです。この数を大阪府として誇っていいと思います。1年間ほぼ毎日のように、どこかの学校で交流や視察が行われている計算になります。その受け入れの窓口になっていますのが、大阪観光コンベンション協会です。海外からの交流の申し込みがありますと、どういう目的で、何人ぐらい、いつ来られるのかを確かめ、それに見合う学校をマッチングします。マッチングだけではなく、その後、学校に行き細かな打ち合わせをします。当日の立会いにも行きます。バスが遅れてくることがあります。スケジュールが狂いますから学校はあわてます。その対応をするようなことも必要です。そういうことをやりつつ、学校に交流の受け入れをしてもらっています。

できるだけ教育的価値がある、質の高い交流をしたいと思いますが、数も多く思うようにはなかなかいきません。大阪府内で学校交流をしたいという申し入れが、2004年度は1,000人台、2005年度には3,788人、海外の学校あるいは旅行社からありました。その際、これまでは教育委員会に話があったり、大阪府の観光振興課、あるいは大阪市などの機関に申し込みをされていたのですが、それぞれの場所で対応するということが非常にやりにくいだろうということで、大阪観光

コンベンション協会に大阪府内の交流窓口を一本化しました。これが2005年度です。窓口は一本化できたのですが、学校のほうではいろいろな事情があり、なかなか交流を受けていただけない。特に週5日制で土曜日が休みになり、1週間のうち5日しか授業日がない。せっかく大阪で交流をしたいという申し込みがありましても、いろいろな行事が月曜日から金曜日までに入っている中に、新たに1カ月、2カ月先の交流まで受けていただけない。2005年度までは学校の事情がわからないまま交流の依頼をして断わられていたようです。

教員を定年退職した私がコーディネーターの仕事を引き受けたのは2006年です。私は、学校にはいろいろな事情、課題がありますが、とにかく大阪に学校交流の申し込みがあれば引き受けてもらい、そのうえでできるだけ生徒中心の交流をしてもらうことによつて、受け入れ校にとっても意味のある交流ができるのではないかと考えました。2006年度は8,041名、そして昨年度は1万1,072名と2年間で約3倍の交流人数となりました。量的拡大という面では、かなり成果があったと思っております。また2006年度から交流数が急増したもう一つの理由に、大阪府・大阪市・堺市・府や市の教育委員会・観光協会等で「大阪修学旅行等誘致促進協議会」を立ち上げ、協力して訪日旅行の受け入れを図ったことがあげられます。特に大阪府教育委員会の全面的な協力が大きかったと思えます。

訪問者は韓国、中国、台湾の3カ国で94%です。その他はほとんどありません。韓国が約6割、中国が4分の1です。校種別では高等学校が143校、55%で、中学校、小学校と続きます。海外では小学校の生徒が教育旅行で海外に出ているのです。それだけ豊かな家庭が増えてきたのでしょう。その他が48校です。これは専門学校、または幼稚園、保育所、あるいは教育施設に来てもらっています。

次に、交流の意義と受け入れ校の評価についてお話しをさせていただきます。

私は学校交流について次のように考えています。ありがたいことに無料で向こうからやって来てくれて、

国際交流をしましょうと言ってくれているのです。利用しない手はないと思います。受け手の方は、いろいろな思いもあるでしょうが、交流の意義は高いです。先ほど言いましたように、昨年度は約1万人の大阪の生徒が海外の生徒と交流したのですが、その生徒たちが周りの友達に交流の内容を話す、あるいは家庭に帰って話をすると、その影響は横にかなり広がったと思います。それだけではなく、若者の交流ですから、交流したこの体験が、将来必ず彼の中に、あるいは彼女の中に受け継がれていきますね。訪問した海外の生徒たちも、大阪に来ていい交流ができると、当然のことながら、彼らはそれらの国でやがてリーダーシップをとる人物でしょうから、また再び大阪に、あるいは日本にやって来てくれる可能性が高い。学校交流は国際理解の横への広がりだけではなくて、将来に向かってのたてへの広がりにつながると思います。そういう意味で、交流の教育的な価値は高いと私は思っています。

交流の意義の2つ目は、コミュニケーション能力を育てるという点です。相手が日本語をしゃべりましたら、共通話題を見つけて日本語で互いに理解してもらえるよう話す努力をします。日本語が分からなければ、たどたどしい英語で話をするにしても、あるいは中国でしたら筆談をするにしても、そのことを通じて、自分の考えを相手にどう伝えるか、自分たちの頭の中で考え、いろいろ試行錯誤をしてコミュニケーションをとる、このような能力が国際交流を通じて育っていくのではないかと思います。このため、学校交流からは受け入れ校から非常に高い評価をいただいております。「大変良かった」「まあまあ良かった」、合わせまして97%です。普通の評価は3%です。「今後も交流をしたいですか」という質問に対しては、学校の先生は教師の性というのですか、生徒が喜んでいましたら自分たちもやってよかったと思いますので、生徒たちが交流で生き生きしている姿を見て、一回でも交流をしますと先生たちもああよかった、またやっつてやろうということになります。結果は「今後も交流をしたい」が21%、「条件が合えば交流したい」は74%です。このことから、交流がいかに学校で評価をされてい

るかがわかりになると思います。

交流形態ですが、学校は忙しいからなかなか交流を受けてくれないという声があります。それには、生徒を主役にした交流をすればいいじゃないかと思いません。あるいは、手が足りないのであれば、地域の方、あるいは保護者、卒業生の手を借りるというのも一つの方法だと思います。

《パワーポイントの映像を利用して「学校交流の実際」の説明 = 略 》

最後に、交流の課題と対策というお話しをさせていただきます。

1つ目は、先程も申しましたように依頼から交流実施までが1カ月から2カ月と短く、ほとんどの受け入れ校は準備不足です。しかし、準備ができないから申し出を断るのか、やれる範囲で受けるのか、前提条件が同じであっても結果は異なってきます。やれるだけやってみようという姿勢さえ校長先生が示しますと、いろいろな交流の手だてはあります。そのために、私たちはマッチング後打ち合わせに出向き、質問や要望を聞きアドバイスをします。多くの場合、準備期間が短いので、受け入れ校の負担を軽減するため、普通の授業を使ってください、普段の部活動でいいです、生徒さんに任せてくださいと言います。生徒はいろいろなアイデアを持っています。特に大阪の子はいろいろなことをやります。大阪の観光資源は人材だと思います。若い子のとてつもない資源を活用しますと必ず立派なものができますので、生徒を主役にしてください、と私は校長先生にいつもお話しをさせていただいています。

2つ目は交流費用の捻出です。訪問校は必ず記念品を持ってこられます。そのお返しをどうすればよいか。飲み物代をどうするか。学校は今お金がないですから、一部子ども大阪観光コンベンション協会で負担していますが、交流件数も多くなかなか全額は出せませんので、この辺のところが今後の課題だと思います。

学校文化や交流姿勢の違いから問題や誤解が生じる

こともあります。時間にルーズで訪問時間が早かったり遅かったりします。日本の学校はきちんと時間管理をするのが普通ですけれども、海外から来られる場合は、そういうことが往々にしてあります。また、交流する際のマナーや態度に驚かされることもあります。生徒だけでなく、視察団の先生方でも、帽子をかぶっていたりチューインガムをかみながら学校に入ってくられます。それを見て困ると思われるのか、それとも異文化理解の一つのチャンスだと考えられるか、受け取り方はさまざまです。逆に、海外から来られまして一番驚かれるのは、日本の女子生徒のスカートの短さです。また先生に対する生徒のなれなれしさにも驚かれます。お互いにいいところ、悪いところもありますが、同じではなく違うことを理解することも大切だと思います。ただ、直前のキャンセルや予定変更、またチューインガムなど目に余るものは、私たちコーディネーターが立ち会っていますので、対応させていただいています。

交流課題に、訪問校から姉妹校提携をしてほしいとか、あるいはホームステイの希望が増えていることがあげられます。しかし、大阪では住宅事情もありますし、また日本人はお客様をもてなすのが下手ですので難しいです。特に韓国、台湾、中国から来る場合は、目の青い欧米人と違って姉妹校提携やホームステイの受け入れは、なかなか保護者の積極的な理解が得られない。そこで、私は向こうへまず行きましょうよ、と大阪の学校に呼びかけています。例えば韓国であれば、台湾、中国であれば、富裕層の生徒が来てくれていますから、向こうでの受け入れはいくらでもできます。まず、向こうでホームステイをさせてもらおう。次に大阪でそのお返しで泊まってもらおう。これは可能ですね。こういうギブアンドテイクじゃなくて、テイクアンドギブという発想もホームステイでは必要ではないのかなと思っています。

今年度、その例として成功したのは、日中友好協会さんにお金を出してもらい、大阪の高校生を約20名中国へ派遣しました。逆に中国から同じ数をお阪に受け入れました。中国派遣はホームステイの受け

入れを条件にしました。生徒の家で受け入れられない場合は、在籍する学校で面倒をみてもらいました。こういう形でのホームステイの受け入れは案外うまくいきました。この方法でのホームステイを東南アジア、あるいは東アジアの国々に普遍していくというのも、今後の課題かなと思っています。

講演

「旅行業界から見た日本の青少年ツーリズム交流の現状と課題」

ツーリズム・マーケティング研究所 取締役マーケティング事業部長

高松 正人

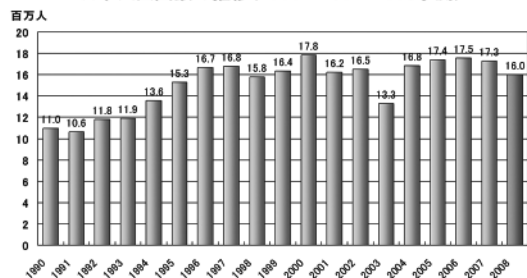


本日は、この約10年間に、日本の若者達の海外旅行の中で何が起きているかを皆さんと一緒に考えながら、この後のパネルディスカッションにつなげていきたいと思っております。

Japan Tourism Marketing Co.

日本人海外旅行者が構造的に変化

日本人出国数の推移(1990~2007+2008予測)



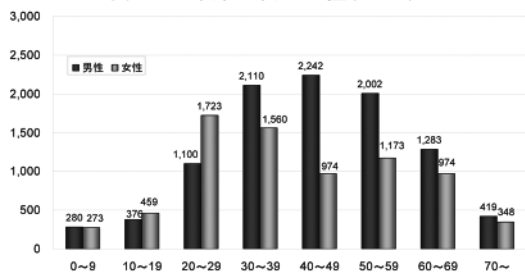
www.tourism.jp

Source: Ministry of Justice, arranged by JTM

日本人の海外旅行者の動きは、2000年に1,780万人を記録後、上がったたり下がったりして今また下降曲線を描いています。今年は1,600万人を超えるか超えないかという状況です。

Japan Tourism Marketing Co.

30~50代男性が海外旅行の主役、次いで20代、30代の女性(2007)



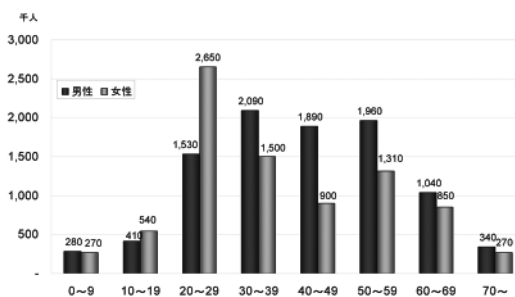
www.tourism.jp

資料: 法務省(出入国管理統計)

2007年の日本人海外旅行者の性別、かつ年齢層別のグラフです。30~50代男性の海外旅行の多さが目立っています。全てではないですが、かなりの割合が出張、仕事に絡む旅行ではないかと思えます。次に多いのが20~30代あたりの女性です。

Japan Tourism Marketing Co.

2000年以前の海外旅行は、20代女性が牽引していた



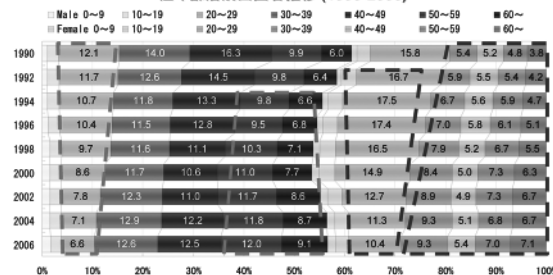
www.tourism.jp

資料: 法務省(出入国管理統計)

2000年は今と大きく様相が違い、20代女性が一番多く265万人。数十万人の違いですが、2000年~2007年の間に、海外旅行する人たちの中身が大きく変わってきた。しかも、一番大きな変化を示しているのは20代です。

Japan Tourism Marketing Co.

日本人海外旅行の主役は若者からシニアにシフト 20代のシェア28.4%(1992)⇒17%(2006) 性年齢層別出国者推移(1990-2006)



www.tourism.jp

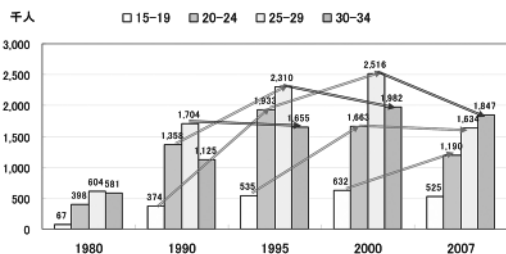
Source: Ministry of Justice, Statistics on Immigration Control

1990年~2006年まで2年毎に区切り、性・年齢層別に見たグラフですが、1990年代に20代の男女合計は27.9%でした。一番20代が多かったのが92年で28.4%でしたが、グラフを見ると20代は段々下がっていき、つまり全体での20代のシェアが下がってきています。2006年になると17%にまで減少し、約10%以上シェアダウンしています。誰が多くなったのか。特に女性の30代、40代以降の層です。若者から

中高年齢層に海外旅行者がシフトしていったことがお分かり頂けると思います。

www.tourism.jp

青少年海外旅行のリード役は20代から30代に 青少年出国者の年齢層別推移



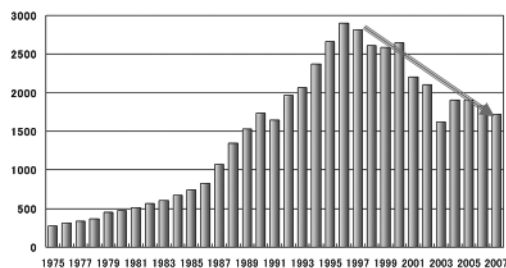
www.tourism.jp

Source: Ministry of Justice, arranged by JTM

90年代に10代後半だった人たちは、95年に20代前半、この5年間に矢印の傾きが示すように海外旅行者が増加しました。同様に、95年に10代後半だった人は、2000年に20代前半になり、2000年に10代後半だった人は、2005年に20代前半になったのですが、だんだんグラフの傾きが緩やかになっています。10代から20代にかけての「さあ20代になった、海外へ行くぞ」という動きが見えなくなっている。その5年後はさらにカーブが寝てきています。2000年は20代前半から20代後半にいくと、同じ世代の人たちの数が下がり、さらに、20代後半から30代になると全部右肩下がりです。

www.tourism.jp

20代女性の出国数減少が止まらない

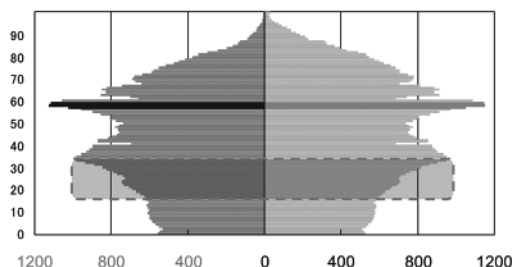


www.tourism.jp

20代女性の出国数のカーブです。一番多かったのが1996年、この層だけで約300万人いました。今では200万人も割り込み、急激に下がっています。盛り返す気配が全くない。この原因のまず一つは、若年層人口の減少です。

www.tourism.jp

30代以下の人口はさらに減少 日本の人口構造 2007



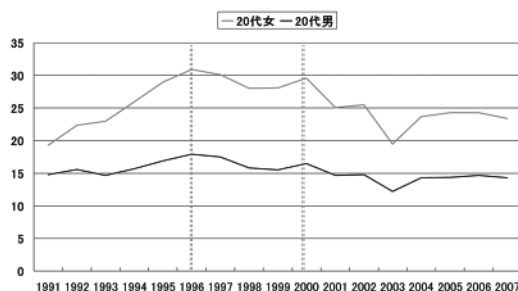
www.tourism.jp

Source: Ministry of Justice, Statistics on Immigration Control

日本の人口構成で一番大きいところは60歳前後の団塊世代、その次が35歳前後です。そして、男女とも20代から先は下がる一方です。人口が減少するから、海外旅行者も減少するというの理由ですが、それだけでなく、最近の20代の人たちの海外旅行に対する興味が下がってきているのではないかと。単に人口の減少だけでは説明できないようなことが起きています。

www.tourism.jp

どうなった20代 20代の出国率の推移



www.tourism.jp

資料: 法務省「出入国管理統計」

出国率という概念を表したグラフです。出国率とは、ある世代の人たちが1年間に海外旅行に行った数をその世代の人口で割ったもの。100人のうち何人が海外旅行に行ったかを表す数字のグラフです。20代女性は96年に30%を超え、約3人に1人は海外旅行をしていたということですが、その後出国率がどんどん下がり、2003年のSARSのときに、大きく落ちています。そして、2006、2007年は、2001年9・11のときよりも出国率が低く、20%を少し超える程度。かつて3人に1人だったのが、今や4人に1人も海外旅行に行っていない。男性も緩やかですが下がってきて

います。2000年にもう一度盛り返しそうなグラフが、2001年9・11、そして2003年のSARS後、もう回復しようがないような形になってきています。これまでは憧れ、楽しそうなものだった海外旅行が、少し違って見えてきたのではないかというようなことが伺えます。

©Japan Tourism Marketing Co.

あなたにとって海外旅行とは？ 年齢別キーワード トップ5

20-24M	割合	25-29M	割合	30-34M	割合	35-39M	割合
異文化	21.9%	リフレッシュ	15.5%	異文化	13.9%	リフレッシュ	22.4%
見聞を広める	9.4%	異文化	10.7%	リフレッシュ	13.2%	異文化	14.0%
楽しみ	7.5%	楽しみ	9.5%	気分転換	10.4%	非日常	11.2%
リフレッシュ	6.3%	非日常	9.5%	息抜き	9.0%	気分転換	11.2%
経験	6.3%	気分転換	7.1%	非日常	9.0%	楽しみ	8.4%

20-24F	割合	25-29F	割合	30-34F	割合	35-39F	割合
リフレッシュ	14.3%	リフレッシュ	17.2%	リフレッシュ	17.2%	リフレッシュ	21.4%
異文化	13.1%	異文化	13.0%	ごほうび	12.7%	楽しみ	13.7%
楽しみ	11.9%	楽しみ	12.0%	日常からの解放	10.7%	ごほうび	11.1%
癒し	9.5%	ごほうび	9.4%	異文化	10.0%	非日常	9.4%
非日常	8.3%	現実逃避	9.4%	ストレス解消	9.3%	異文化	9.4%

資料：(株)フォーリズム・マーケティング研究所
「海外旅行実態調査レポート」海外版

www.tourism.jp

©Japan Tourism Marketing Co.

シニアのほうが好奇心旺盛 年齢別キーワード トップ5

60-64M	割合	65歳以上M	割合
見聞を広める	13.8%	楽しみ	13.1%
楽しみ	11.2%	見聞を広める	11.2%
気分転換	10.3%	リフレッシュ	7.5%
異文化	6.0%	非日常	6.5%
あこがれ	5.2%	あこがれ	6.5%

60-64F	割合	65歳以上F	割合
楽しみ	18.1%	日常からの解放	13.6%
見聞を広める	11.0%	リフレッシュ	11.9%
日常からの解放	9.4%	楽しみ	10.2%
リフレッシュ	7.9%	癒し	6.8%
異文化	7.1%	見聞を広める	6.8%

資料：(株)フォーリズム・マーケティング研究所
「海外旅行実態調査レポート」海外版

www.tourism.jp

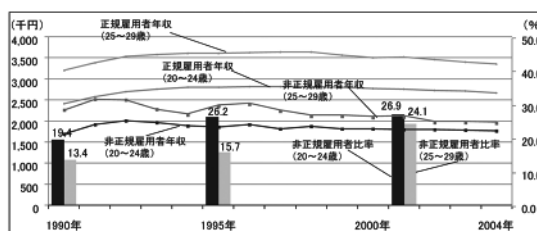
私どもで毎年実施している海外旅行者に対する調査で、「あなたにとって海外旅行とは？」の質問に3～4,000人からフリーアンサーで回答を得ました。若年層の海外旅行は、異文化に触れる、見聞を広めることだという話が先の講演でありましたが、20代前半の男性は、海外旅行についてそのとおりのことを言っています。ところが20代後半以降は、「リフレッシュ」、「気分転換」、「息抜き」、「日常からの解放」、「ストレス解消」、さらには「現実逃避」というような言葉がどんどん出てきます。これは40代、50代も全然変わりません。とにかく毎日疲れ果てているので、携帯も鳴らない、メールも届かない海外に行くと、2-3日の

んびりしたい、とような感覚ではないでしょうか。しかも20代後半ぐらいから「リフレッシュ」がトップにきています。20代にまでその傾向が出ているのは、少し悩ましいことだという感じがします。最近の若い人たちは、「さあ楽しむぞ」、「新しいものに触れるぞ」という気持ちで海外旅行に行っていないのではないのでしょうか。

しかし、60代以上には気持ちが若い人がいます。50代までは「リラックス」、「リフレッシュ」、「現実逃避」、でも、60代になると、「見聞を広める」、「楽しみ」、「異文化」、「憧れ」といった言葉が出てきます。これは実際に旅行の仕方を見ても違って、30～50代までの方々は、できるだけ1か所でゆっくりという旅行をします。でも、60歳を過ぎると、一日に一つでも多く見たいので、様々なところを回るようなツアーに参加して、朝から夕方まで頑張ります。現役で働く50代までの方々は、旅行から帰った次の日から仕事ですが、60代以上の方は毎日が日曜日、旅行後もまたゆっくり休めるので、旅行の中で頑張れる、というようなことがあるのではと思います。

©Japan Tourism Marketing Co.

非正規雇用者の拡大と伸びない年収



www.tourism.jp

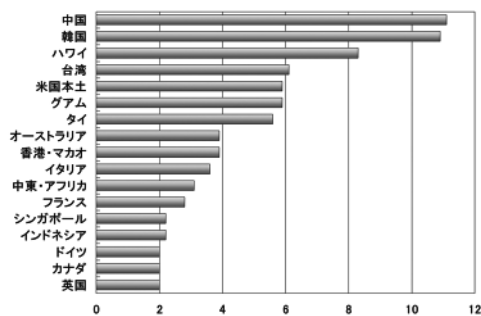
3つ目の背景として、可処分所得、お金がないという問題があります。1990年～2004年の正規雇用者と非正規雇用者の割合を比較してみると、特に20代は、非正規雇用者の割合が上昇してきています。正社員でなく、派遣や契約社員、フリーターが増えている。また、正規と非正規では年収の差があります。ただでさえ年収が低いのに、さらに年収額は右肩下がり。格差の拡大が若年層にも出てきているのではないかと。M

字社会という言い方が今アジアの中でありますが、日本でも同じことが何となく感じられます。

つい最近、首都圏にある2つの大学の先生と別々に話をしました。ある先生から、この1年間に海外旅行をしたかどうかを100人ほどの教室で学生に尋ねたら、2-3人しか手が挙がらなかった。学生たちは、海外旅行は言葉が通じないから大変だとか、怖いとか言っていた、という話を聞きました。一方、別の大学の先生からは、うちの大学の学生はほとんど全員海外旅行に行っていますよという話がありました。両大学間には違いが2つあります。いわゆる試験の偏差値と親の平均収入の違い。同じ大学生で同じ観光専攻の学生ですが、この2つの違いでこれだけの差が出ています。

Japan Tourism Marketing Co.

青少年の海外旅行先

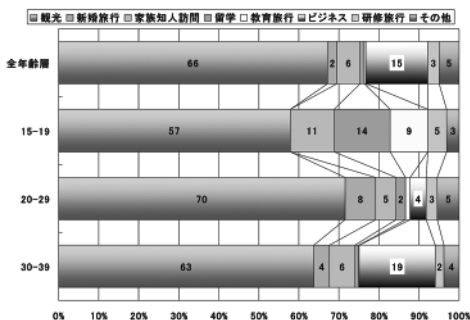


www.tourism.jp

日本の青少年が一番よく行っているのが中国、韓国です。後はハワイ、台湾、まさにマストツーリズム・ destinationsです。強いて言うと、中東、アフリカが他の世代に比べて多いかなという感じです。

Japan Tourism Marketing Co.

青少年の旅行目的



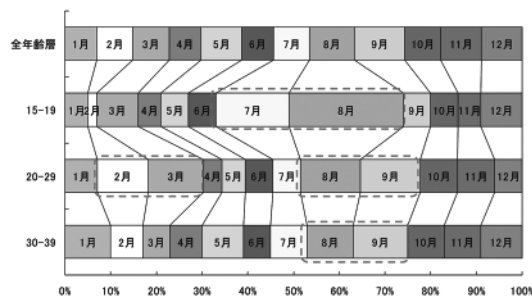
www.tourism.jp

旅行目的を見ると、15-19歳は「観光旅行」が6割

弱で、次に多いのが「家族・知人訪問」です。帰国子女で海外に友達がいるとか、親が海外で単身赴任しているとかでしょう。「教育旅行」で海外に行く人も結構います。20代では「観光」の割合が増えてきますが、「知人訪問」も多少あります。30代になると随分変わって、「観光」に次いで多いのが「ビジネス」、この年齢層から出張で海外に行き始めるのでしょうか。

Japan Tourism Marketing Co.

青少年海外旅行出発月 (2007)

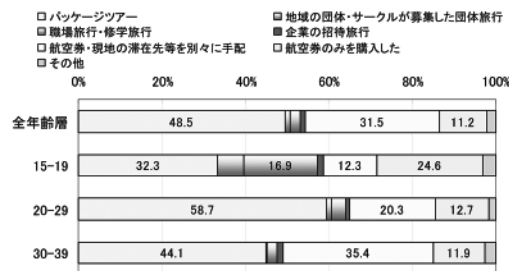


www.tourism.jp

どの月に海外旅行に出発するかは世代によって随分差があり、10代は知人訪問にも、学校の海外修学旅行や語学研修も大体夏休み期間を使いますから、7月～8月が多い。20代になると、卒業旅行にあたる2-3月と、夏休みにあたる8月に加えて9月が多いのは、やはり学生の特権でしょう。8月中は航空券もツアーも高い、9月になると値段も安くなるので、大学の後期が始まる前ぐらいに駆け込みで行く。社会人も8月に夏休みが取れますが、実際には安くなる9月に行っている方々が随分います。30代になると、8-9月が多いのですが、出発月は比較的分散しています。

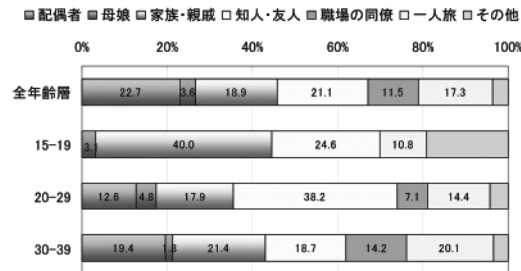
Japan Tourism Marketing Co.

海外旅行の旅行形態



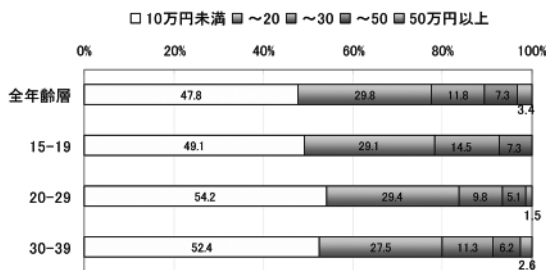
www.tourism.jp

旅行の同行者



旅行形態で見ると、若い方々はパッケージツアーが結構多い。誰と一緒にいくかということでは、10代では家族と一緒に旅行する方が多いようです。20代では、知人、友人。30代は、いろいろな人と一緒にいくという感じです。

海外旅行費用

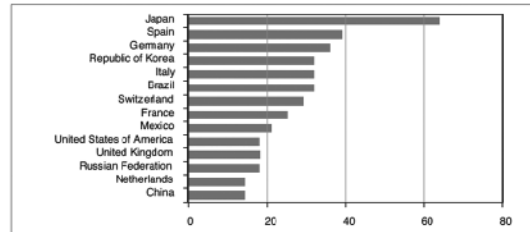


午前中の講演で、青少年の旅行は決してチープな旅行ではないというお話がありました。10代の方々の海外旅行費用は平均とほぼ変わりません。親がかりだからかもしれません。20代は、他の世代に比べて、10万円未満がやや多い感じですが、それほどの大差はなく、30代もわかり。決して20代だから、若いから、安い旅行ばかりということではなさそうです。強いて言うなら、50万円以上はさすがにほとんどいないですが、ハネムーンになるとひとり50万円以上かける人もいます。

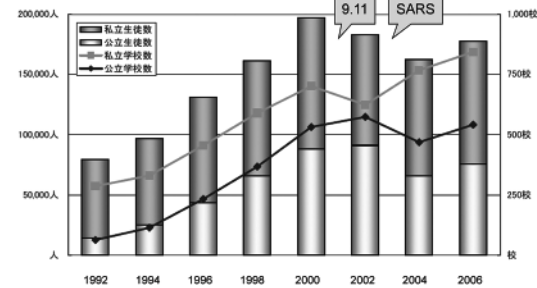
UNWTOのレポートに、世界の幾つかの語学学校で登録している学生たちの国籍を調べたら、何と日本人がトップでした。調査対象の3分の2の学校に日本人が在籍。日本人の若者に語学目的での海外渡航が非常に多いことが分かります。

日本は語学学習目的の旅行に最も熱心？ 3分の2の語学学校は、日本から生徒が来ている

Figure 7.3 Main source markets for language students, 2005 (%)

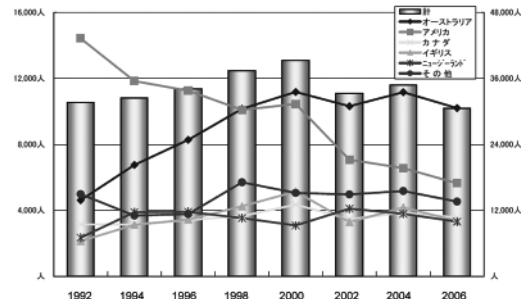


実施校数は増えても、生徒数は伸び悩み 海外修学旅行の推移



海外修学旅行は、2001年9・11後の2002年、SARS後の2004年に大きく減少しました。安全・安心が教育旅行では非常に大切なので、事が起こると減少する。日本の場合は1-2年前に修学旅行が決まるので、事が起こった後の2-3年まで影響します。でもまた、2006年には公立・私立とも海外修学旅行が増えています。折れ線グラフは学校数ですが、学校が増えた割には1学年あたりの生徒数が減少してきているので、全体として生徒数が伸びない傾向が見られます。

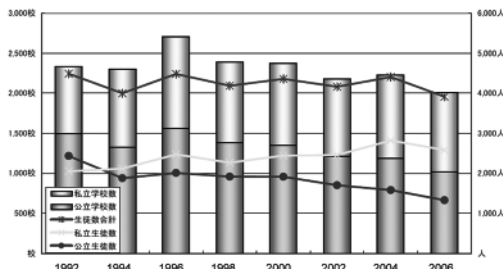
海外語学研修旅行(学校主催)の推移



修学旅行以外にも、学校が主催する海外語学研修（3ヶ月未満の短期留学を含む）があります。2000年あたりをピークになかなか参加する生徒数が伸びない。これも構造的な問題なのかもしれません。

・JTM Japan Tourism Marketing Co.

中・高校生海外留学(3ヶ月以上)の推移



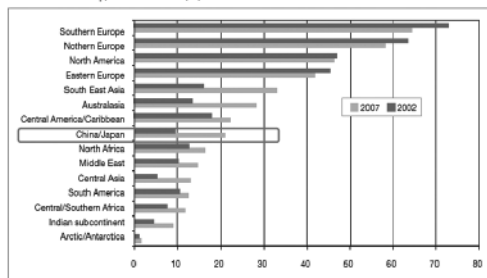
www.tourism.jp

3カ月以上の海外留学は、この世代の人口の減り方よりも減少が激しい。高校生が海外留学しなくなっているのは、幾つかの留学関係団体の話からも見えてきています。受験が大変だから大学に入ってから留学しようとか、海外に向いていた目が内向きになってきているのではないかと、心配させられるような数字が出てきています。

・JTM Japan Tourism Marketing Co.

訪問したことのあるデスティネーション

Figure 2.7 Destinations ever visited over entire travel career and destinations visited on most recent main trip, 2002 and 2007 (%)



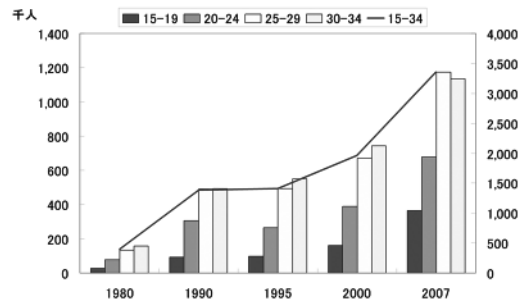
Source: WYSE Travel Confederation Independent Traveller Survey, 2007

www.tourism.jp

これもUNWTOの資料からですが、2002年と2007年を比較すると、世界の若者たちの訪問先は欧州が多いです。中国と日本は一緒になっていますが、この5年間で倍以上になっています。世界の若者たちは中国や日本、アジアに目を向けていることが見て取れます。

・JTM Japan Tourism Marketing Co.

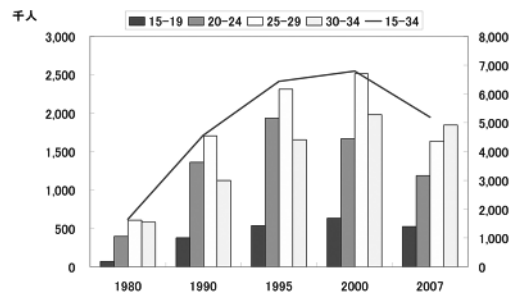
年齢別訪日外国人数



www.tourism.jp

・JTM Japan Tourism Marketing Co.

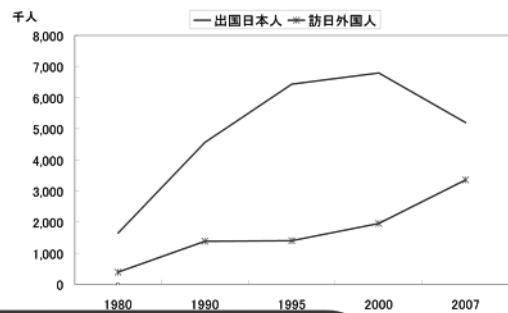
年齢別出国日本人数



www.tourism.jp

・JTM Japan Tourism Marketing Co.

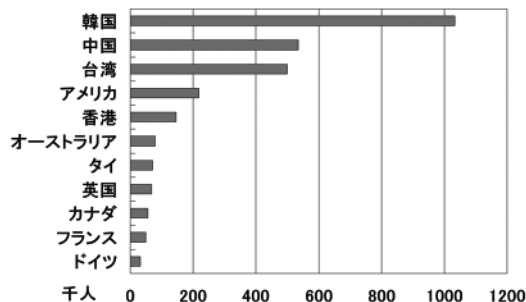
出国日本青少年 vs. 訪日外国青少年



www.tourism.jp

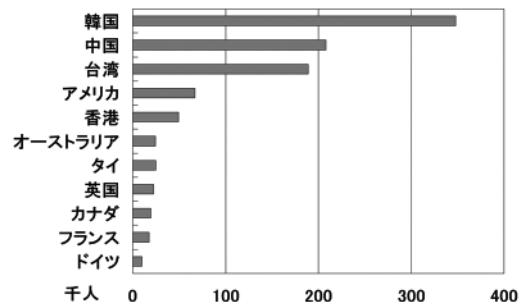
実際に訪日する15～35歳の人たちは、どの層も毎年増えています。特に2000年～2007年の間に急増しています。一方、日本の15～35歳の人たちの出国は、先ほどの訪日のグラフとカーブが全く違います。この両グラフを合わせてみると、あと3年ぐらいで人数が逆転するのではないのでしょうか。

訪日外国人青年旅行者(15~34歳)数上位の国(2007)

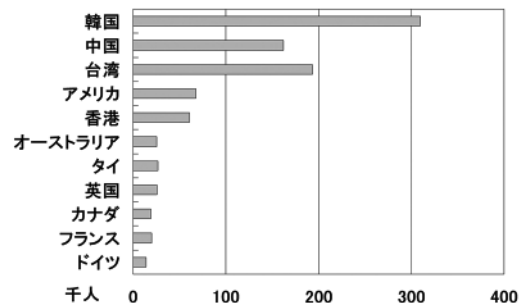


訪日外国人のなかで、一番多いのは韓国人です。次に中国、台湾、ぐっと下がってアメリカ、香港、オーストラリアが続きます。

訪日外国人青年旅行者(25~29歳)数上位の国(2007)



訪日外国人青年旅行者(30~34歳)数上位の国(2007)

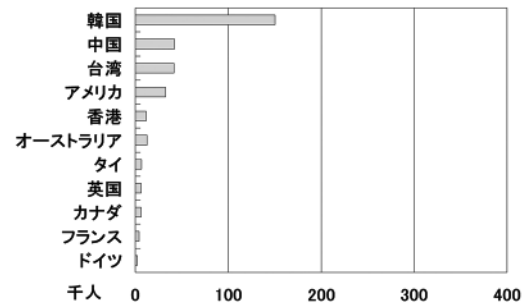


す。学校訪問のない修学旅行は、文部科学省の統計に反映されませんが、合わせると10代だけで十数万人という規模は十分考えられると思います。20代もやはり韓国が多いですが、中国と台湾あたりも多くなってきます。韓国の特に20代は、東京を中心に週末の都市でのショッピングと遊びが多いですが、今年は円高ウォン安で、日本への旅行費用が韓国人にとって倍近く高くなってしまい、急激に落ち込んできていると思います。20代後半になると、中国と台湾、また、欧米からの数が増えてきます。30代は台湾が多く、欧州あたりも増えてきます。

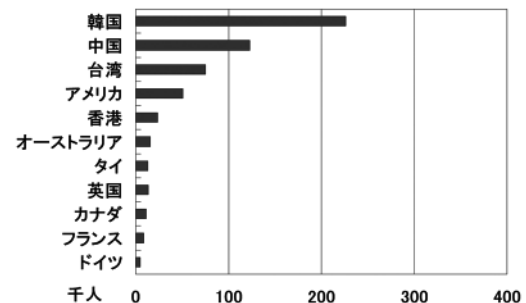
いずれにせよ、日本は世界の若者達から注目されている国ではありそうです。

日本から海外へ行く若者の減少を食い止め、訪日外国人の増加に拍車をかけるためには何ができるか、次のパネルディスカッションにつなげる前に、簡単にまとめたいと思います。

訪日外国人青年旅行者(15~19歳)数上位の国(2007)



訪日外国人青年旅行者(20~24歳)数上位の国(2007)



年齢層別で見ても、10代の韓国人がすごく多い。これは修学旅行かと思われます。いわゆる学校訪問を含めた公的な形で統計がとられている修学旅行と、それ以外に日本と同様に、学校訪問なしで、観光と工場見学などの教育目的が入っている修学旅行とがありま

まず世界的な動きの中では、青少年の旅行は増えてきていますが、日本人は90年代をピークに減少傾向にあるということ。若年層の人口減少という構造的な要因がありますが、それだけではなく出国率の低下、つまり、海外に対する興味、意欲が低下してきていることが大きな問題です。一方で、訪日外国人、特に若い外国人たちは増えています。アジアからが多いですが、欧米の青少年も増えてきています。日本に海外の方々が来られる際に、何か不便なことや障害はないか、それを取り除いたらもっと増えるのではないだろうか。そういったことを、次のパネルディスカッションでぜひ考えていきたいと思います。

ご清聴ありがとうございました。

パネルディスカッションと Q & A

「日本とアジア・太平洋各国の青少年相互理解に
資するツーリズム交流の形態はどのようなものか」

司 会

高松 正人 ツーリズム・マーケティング研究所 取締役マーケティング事業部長

パネリスト

阪南大学学生 4 名

笹田 美香

副井 恵

古田 奏

安江 智世

A P U 留学生 4 名

パジェット・ティモシー (アメリカ合衆国)

アンセリー・インクルマー・ジョージ (ガーナ共和国)

シン・ナタリア (ウズベキスタン共和国)

エボン・ジョセフ・ンドベ (カメルーン共和国)

コメンテーター

各講演者

パネルディスカッション

○高松：

これまで講演をお聞きになって、世界的に青少年の旅行が拡大傾向にあること、また、近年、日本を訪れる世界の青少年の数が大幅に伸びていることがご理解頂けたと思います。では、世界の若者達は日本のどんなことに魅力や興味を感じて日本に来ているのでしょうか。

最初にAPUの皆さんにお伺いしましょう。皆さんの国の若者にとって日本は訪問してみたい国ですか。世界の青少年にとって、日本の魅力とは何でしょう。何をしたり、体験したりしたくて日本に来るのでしょうか。ティモシーさんからお願いします。

○ティモシー：

個人的には、APUの留学生として参りました。APUというのが非常によく知られてきていて、5,000人のうちの30%以上が海外から来ているということで、さまざまな国の非常に多様性に富んだ留学生が集まっているというのが魅力です。すなわち真の国際的な教育が受けられるということが大きな魅力でした。

2番目のポイントとして、日本というのは一つのターニングポイントに来ているということで、日本がまさに国を開いて、そしてその社会に門戸を開いているという時期に来ていると思います、日本語を超えたところで。

これまでは言語というのは非常に大きなバリアでした。日本で教育を受けるという場合の大きな障害であったわけです。いわゆる大学の在校生のレベルにおきましては、日本語以外の言語で教育を受けるということは大変なことだったと思いますが、そのあたりが非常に今魅力かなと思います。

○高松：

ティモシーさんをご自分の経験から、国際的な教育を受ける機会があることを挙げて下さいました。

次はガーナから来られたジョージさん、ガーナの若い方々にとって日本の魅力はどんなところでしょう。

○ジョージ：

正直に申しまして、ガーナあるいは西アフリカの大半の学生はそれほど日本というのは選択しません。やはり言語の問題があります。なかなかガーナの生徒が日本に来るという話は出ません。しかし、私にとりましては、今日本にフルコースで、英語で授業を受けられるという学校がある。私自身、実際日本に参りましたとき、大きな挑戦でした。すなわち、言語という問題でした。買い物に行っても、なかなか通じない、難しいわけですね。例えば、何かお肉を買いたい。しかし豚肉は食べたくないという場合がありますよね。だけど、実際にこれが豚肉なのか、あるいは牛肉なのかわからない。そういったところも難しかったですし、そういった難しさがあるからということで、なかなか日本というのは選択肢にならない。だから、大半の学生は、アメリカとか、あとヨーロッパに行く人が多いですね。日本というのは最後のオプションだということがあると思います。

○高松：

ジョージさんはAPUを選ぶとき、欧米の学校と比較してAPUを選んだのですか？最初から日本の学校で勉強してみたいと思ったのですか？

○ジョージ：

事実、中国に行くチャンスもありました。アジアというチャンスはありました。それともう一つ、新しいエリアだということですね、新しいチャンスではないかと。とにかく完璧な新しい環境の中で勉強ができると、そういった意味では、私のほかの同僚とか友達がアメリカとかヨーロッパで学んだことと全然違うというわくわく感がありました。だから、

そういったところに行きたいかと言われたときに、全く新しい今まで知らない環境で学ぶというのもいいかなと。すなわち、そこで全く何も知らない真っ白なところから、全くすべて日本語で書かれている。確かに最初は恐怖でした。だけれども、思ったよりも簡単だったということですね。もちろん、もっとやらなきゃいけないことはあります。日本は恐らくセキュリティ、安全性という意味では世界でもベストではないかと思います。非常に居心地がいいですし、それからいろんなサインだとか言語といったものですね。実際にどのようにコミュニケーションしていくのか、どのようにしてその言葉を読んでいくのか、基本的なところですね。これは本当に大変なところではあります。

○高松：

日本の生活は思ったよりも何とかなったという感じのようですね。では、今度は、ウズベキスタンから来られたナタリアさん、お願いします。

○ナタリア：

まず中央アジアの国からということで、日本のイメージは、アフリカの国々の皆さんと同じです。すなわち日本というのは、非常に苦勞しそうな国であると。中央アジアの我々にとりましては、やはり旅行する、あるいは勉強するというのは、アメリカとかヨーロッパが目的になりますね。韓国だとか、日本だとか、アジアの国々に行くというのがその次に来る。

なぜ私が日本で勉強しようと思った目的というのは、やはり新しい経験をしたいと思いました。といいますのは、日本というのは全く違う宇宙の星のような感じがするんですね。メディアを通しての多くの情報もありませんし、私が知る限りでは大体、侍というイメージがありました。そういった歴史的なことに、私、非常に興味があったんです。そして、それと技術にも非常に興味、関心がありました、ロボットだとか。だから、私の日本に対するイメージ

というのは、そういった意味ではミクスチャーなんですね。侍が片一方にいて、そしてロボットがいると。そういったものが日本に対するイメージ、そういったところで日本に来ました。ですから、現実はどうなのかということを見たいというのが一番の大きな目的でした。

○高松：

ナタリアさんが今見ている日本の現実、どんなものですか？日本に来る前に思っていたものとはかなり違っていましたか？

○ナタリア：

いえ、日本は全く知らない宇宙ではなかったです。地球上に存在する同じ国だということがわかりました。一番好きなのは、非常に国際的な社会であるということですね。特にこのAPUというのが、私自身の知識だとか経験を非常に広げることができていますし、そういった意味ではラッキーだと思います。すなわち、こういった87カ国の学生と一緒に勉強できるということはいいと思います。こういったチャンスというのは日本の学生さんたちにも経験してもらいたいと思います。

○高松：

次は、カメルーンから来られたエボンさんにお話をお聞きしましょう。

○エボン：

実際、日本というのは大半のカメルーンの学生にとってオプションじゃないんです。言語のバリアがありますし、それから余り日本について情報もたくさんありません。カメルーンの学生というのは大体アメリカとかヨーロッパで勉強するわけですが、私は個人的には、アジアの文化に非常に興味がありました。また中国にも長年住んでもいました。ということで、中国のシステムを学んでいき、その中で日本に来るチャンスを与えられたわけですが、それ以

外にももちろんヨーロッパに行くチャンスもあったのですが、私はあえて日本を選びました。というのは、カメルーンの学生はアメリカとかヨーロッパで勉強する人が多いのですが、私は全く違うことをやりたかったのです。APUですと、カメルーンからの留学生は2人しかいません。ですから、そういった意味で特別でありたいと思った。そして非常にプログラムもよいと思いましたし、またAPUというのはいわゆる多文化が存在をしていますので、やはりAPUを通して、私はベストオプションだったと思います。だから日本を選ぶということに決めました。

○高松：

私の会社にもAPU出身の社員がいましたし、インターンも何人か採っている関係で、これまでに何度かAPUのキャンパスに行ったことがあります。日本の一般的な大学とは全然空気が違って、自分の子どももここで勉強できたらいいなと思います。

今度は日本の学生の皆さんにお聞きしますが、日本人として、日本の外から日本を見てみると、どのあたりが日本の魅力だと思いますか。阪南大学の留学生や、皆さんがお付き合いのある外国人の方から見た日本の魅力は何でしょう。笹田さんからお願いします。

○笹田：

私は日本人なので、お寺や京都の世界遺産などに魅力を感じているのだと思いますが、私の友達の阪南大学の留学生によると、先ほど話に出たように、例えば先生に対して慣れ合いだとか、スカートが非常に短くてはしたくないとか、日本より自国の方が良いと頻りに聞きますので、そういうのを感じさせてくれるのが魅力なのかなと思います。何か日本に来てみて、違いというか。

○高松：

違いが分かるところがいい。

○笹田：

そうですね、そういうのをすごく感じました。

○高松：

なるほど。次に、副井さん、いかがでしょうか。

○副井：

私は昔から田舎に住んでいて、大阪に比べてとても空気がいいです。また、人もいいので、日本の魅力は人にあると思います。人と人との関わり合い、思いやりや、大和撫子、着物といった和の心を海外の人にももっと知ってほしいと思います。

○高松：

日本の魅力は人だということですが、JNTOの調査によると、訪日外国人が、日本に来る前と訪日後とを比べて一番印象が変わるのが、人に対する印象なんですね。来るまではそんなに期待してなかったけど、日本に来て何日間か滞在して帰るときには、人の魅力の点数がずっと上がっている。そのあたりをとらえて副井さんはお話し下さったのだと思います。古田さん、いかがでしょうか。

○古田：

私は電車も走っていないような田舎で生まれ育ったので、阪南大学に入学して、電車が通っている、大きなビルがたくさん建っているなという、逆に私が留学生の気分です。留学生の方々は日本に対して、京都、奈良や、お寺というイメージと、先ほどのお話にもあった、最先端技術、大きなビル、ロボットや車とか、そういう2つのイメージがあると思います。もう侍はいませんが、私の出身地のような山があり、おじいちゃん、おばあちゃんが農作業をしているような「昔ながらの日本」が実はまだある。小さな国ですが、実はまだまだ知らない日本があるよ

ということ、留学生の皆さんに知ってもらいたいと思います。

○高松：

すごく本質的なことをお話し頂けたのではと思います。究極のコミュニティーツーリズムの話ですね。3年前前にJNTOが香港の消費者を日本に招待して、日本の様々な場所にご案内したあとで「一番どこが印象に残りましたか」と聞いたら、草津温泉に行く途中の田舎の風景がよかったという回答が多かったそうです。古田さんがこういうところを見せてあげたいと言った「昔ながらの日本」が、外国人の方にとっても印象的なのでしょうね。今度は、安江さんにお話をお伺いします。

○安江：

私は今新しくアルバイトを始め、結構外国人の方と触れ合う機会が最近増えました。私は全然英語が話せないですが、一生懸命に観光案内などをします。そして、私だけでなく社員の方々も英語で一生懸命に対応する姿が、とても日本人特有の優しさ、ホスピタリティーの姿勢だと思うんです。いろんな観光地に行ったりしても、おばあちゃんでも、すごく一生懸命外国人の方に対応したりしている姿を見るので、そういう優しさとかが、お寺などの日本文化以外にも、日本人を観光対象として見てほしいところかなと思います。

○高松：

やはり「人」と「ホスピタリティー」が大きなキーワードのようですね。実際に日本のホスピタリティーは、外国人の間で随分高く評価されています。今、阪南大学の学生さんから、日本の魅力をいろいろご紹介頂きました。

A P Uの学生さん達は、そういうことを普段感じていますか。今の安江さんの「おばあちゃんでも…」のお話を聞いて、2002年のワールドカップのときにカメルーンの選手団が大分県中津江村に滞在し、

村のおじいちゃん、おばあちゃんが同国の選手達と非常に仲良くしていた姿を思い出しましたが、エボンさん、日本人の優しさ、ホスピタリティー、そういったところに人の魅力を感じることはありますか。

○エボン：

確かにそうです。多くの日本の方にお目にかかった私はカメルーンから来ましたと自己紹介しますと、カメルーンを思い出すぐらい、とても親切にしてくださいます。日本人とカメルーンの人はお互い、私にとって温かく感じる人たちなので、日本人に対しても、とても気持ちのいい気分になります。

○高松：

ティモシーさんにお聞きします。エボンさんが話してくださった、日本人の温かさ、親切さ、それから先ほどお話に出たホスピタリティーを、ハワイやアメリカの方々は日本の魅力として意識しているでしょうか。それとも、どちらかという技術や先端的なもの、あるいは新しいものと古いものが入り混じった国という印象の方が強いでしょうか。

○ティモシー：

私はオリンピックゲームのあったジョージア州で育ちました。また、2002年のワールドカップのときにも日本にいました。ですから、皆さんと同じような経験をしたわけですが、アメリカでは見方がハワイよりも狭いと思うんです。ハワイというのは、人口の20%は日本人、日系人です。3世、4世という人たちがいるわけです。そういう人たちがハワイには住んでいる。ですから、ハワイでの見方といえば、とても親しみのある見方をしたいと思います。日本には古い文化、そして新しい文化があると見ています。歴史というと明治、そしてさかのぼって伝統的なものがある。しかし同時に新しい技術が開発されてアジアのリーダーであると。日本というのはリーダーであって、そしてコスタリカとともに

平和憲法を実施しているのは、世界の中でも2カ国しかないということでもあります。ハワイはそれを認識しています。そのほかの米国の州はそうではないかもしれません。

ですから、我々の問題というのは、「ようこそ！日本へ」というマーケティングですけれども、ここで日本にやってきて、非常に特徴のあるところを見るという経験になると思うんです。私は、1999年から日本に学生として来ていますが、親切にしてくれています。ほかの国際学生も同じだと思います。非常に日本というのは閉鎖的な社会ということもあります。ただ、例えば日系人に対して移民の政策があったわけでありまして、20世紀の初頭はそういうような政策があって、そしてその後将来的には移民の政策に関しては一つの課題になってくると思います。それから、地方では人口減少という問題も出てきていると思います。

○高松：

ティモシーさんの発言の中で、日本の姿をマーケティングしていくことが日本の課題の一つだという指摘がありました。まだまだ日本は、世界の若者たちに日本の良いところ、面白さや魅力をきちんと伝えきれていないのではないかと、というふうにも思います。

さて、日本の学生と留学生の両方からお話が出ましたが、APUのクーパー先生から少しコメントを頂けますか。

○クーパー：

両方ともサポートしたいと思います。確かに閉鎖的な社会ということもありますが、個人的な経験を言えば、全くそうではないと言えます。非常に人間性のある社会であると感じております。そして、安全で、進展した、そして機能的な社会。私、オーストラリアで30年間過ごしておりますけれども、生まれはニュージーランドです。ですから、信じてほしいんですけれども、この2つの国は日本の

ような機能性はないです。いろいろな意味で機能性に劣ると言えるわけなんです。

ですから、まず言えることは、海外の人たちというのは十分なメッセージがごく最近までは届いていない。「ようこそ！日本」というプログラムが展開されました。ですから、今の世代、それから将来的な日本人の世代に関しては、そういうメッセージは届くかもしれない。でも以前はそうではなかったわけです。

2点目としては、日本というのは世界にユニークな面を示すことができると思います。人間として一つの特性を示すことができる。親切さ、そして優しさということを示すことができると思うんです。ですから、学生たちはとてもいい経験をして、そして私が感じていることをうまく彼らは説明してくれたと思います。両方の学生さん、うまく説明してくださいました。

○高松：

今度は、日本人でありながら長く海外に住まれ、最近では日本を外から見る機会の方が多いと思われる山川さんに、コメントを頂きたいと思います。

○山川：

私自身、タイで23年以上暮らした経験があります。23年前は、タイについて特にわかっておりませんでした。タイの人は、見たところ同じじゃないかというふうに思ったんです。子供のころです。それ以来ずっとタイを訪問したいという気持ちがずっとあったんです。そして、その国に行っているいろんなことを発見しました。多くのことが共通点としてあります。日本とタイの間、例えば仏教がその一つです。日本人は仏教徒だということになっています。そしてタイもそうなんです。ただ、真の仏教の性質を考えると、日本の場合とタイの場合で、その両者にかなり違いがあると思いました。

日本では毎日お寺に参拝する人がどれぐらいいるでしょうか。もちろんお葬式のときにはお寺には行

くと思いますが、仏教自体がタイにおいては毎日の生活の中に、そして精神的な面に深く結びついているんです。そして分かち合うということが仏教であり、そしてまた相手を思いやりということでもあります。相手への共感、思いやりの気持ちです。それをあらかずものが仏教なのです。ですから、一見とても似ているなどと思って、肌の色も似ていますし、仏教も共通点の一つだと。しかし、20年前、私は、そうしたことが本当ではないということがわかりました。いろいろ学んだと思います。

そして私の国、日本とはいいますと、これもすばらしい国だと思っているんです。ホテル日航に滞在しています。すばらしいホテルです。ロビーにもいろんな人がいて、そして政府関係の人もあればいろんな人を見るわけですが、みんな、つまり360度常に気を配ってくれていると。そしてちゃんと見ていてくれて、本当に人に対して思いやりを示すというふうに言えます。ただ単にあなたの前面だけを見ているんじゃないということ学びました。タイに住むことによって、日本に対する目が開かれたということです。もちろんタイのことも学んだし、そして自国のことも多く学んだと言えるわけです。それが私の気持ちです。

○高松：

タイの中から見たらタイのいろんなことが見え、逆にタイにいるからこそ、日本がまたよく見えてきたというお話でした。青少年の国際交流は、まさにこのあたりがポイントになってくるのではと思います。今までの皆さんのお話を伺うと、日本は様々な面で魅力があり、興味を持たれるデスティネーションだということです。では、日本は、世界の若い方々にとって訪問しやすい国と断言していいのか、あるいは訪問しにくい、比較したら他国の方へ行ってしまうような国なののでしょうか。例えば一般情報を含め、日本の観光情報の発信は十分なのか。先ほどガーナ、カメルーン、ウズベキスタンでは、あるいはハワイを除くアメリカ合衆国でもなかなか日本の情報は伝

わっていないというお話もありました。湯浅先生のお話のように、日本の入国制度、ビザ、物理的な日本への交通アクセス、日本国内の交通手段、国内の旅行費用、青少年の方々が泊まる宿泊施設、様々な面で日本での旅行のしやすさ、日本への訪問のしやすさの課題があるように思います。

日本は他の国に比べて、若い人たちにとって訪問しやすい国でしょうか。

○ナタリア：

若い人が日本に来て旅行しようとするときには言葉の障害があるので、やはり難しい面があると思いますが、同時に、やはり安心できる国ということも言えると思うんです。といいますのも、公共交通が非常に発達しているという点があります。だれかが新しい人であっても日本に溶け込みやすい、すなわち公共交通を使うということは簡単にできるということです。そしてまた英語と日本語両方の表記がありますので、決して難しくはないと思うんです。日本国内の旅行は易しいと思います。

○高松：

ジョージさんは、いかがお感じですか。

○ジョージ：

やはり情報の伝播ということが一番の主題ではないでしょうか。つまりこちらに来る前には、いろいろなことを知りたいと思っていました。また着いてしまえばいろいろとわかると思うのです。私もそういう印象を持ちました。例えば外国人に対してやさしくないかどうか、余り親切にしてくれないかというふうなことがあるんですが、しかし、実際にそこに行くと本当にその人に会うと、ちゃんと対応してくれるかどうかということです。でも、そうでないかもしれません。例えば警察国家というものもありますが、そのような国ですと、だれかにいつも見られているという気持ちを持つかもしれません。しかし、日本に来たときには、人々が全然違うなと思

ました。親切、よそよそしくもないし、顔をそむけるわけでもない。ですから、問題は言葉、英語の問題だったと思います。例えば英語でちゃんと答えてくれるかどうかということでありました。大半の人たちが本当に完璧主義者じゃないかなという気持ちを持ったんです。そして英語をしゃべり出したときに、間違いをしたくないというふうに思っていたらしゃるんじゃないか。ですから、そのように恥をかきたくないから言いたくない、ちょっと逃げてしまうということなんです。最初は逃げるようになってしまふと、そういうふうに思ったんです。ですから誤解が生じると思います。情報が適切に伝わるということはとても重要なことなんです。

日本がガーナとどういうふうな形でかかわっていたかということですが、大使館がありますが、それが日本の方々がどれぐらい知っているかなと思うんです。ガーナに来ましても、日本の大使館がどこにあるのかわかりません。そして日本の人はガーナといえばアフリカのどこかの国だということは知っているかと思いますが、それ以上はないかもしれません。ですから、情報を適切に伝えるということがやはり双方向で必要かと思えます。

もちろん大使館は外国にありまして、そしてきちんとしたポリシーをそこから発信するという役割があると思いますが、日本の政府もその点を意識しているんじゃないか。例えば奨学金を出すというふうなことがあります。アフリカ、そしてどこに行くかということを考えるときには、日本に来て勉強してもらってもいいんですよということ、そしてまた、そこの奨学金を受けて学生となって日本に来た人は、将来のすばらしい大使、ベストアンバサダーになると思います。ですから、マーケティングということになるかもしれません。新聞に書いてあることよりも、自分の実際の経験のほうを信じると思います。ですから、我々の将来は我々の肩にあると思います。国際的な交易、貿易、何であろうと、とにかく日本の状況が私自身よくわかったということが自信になっています。ほかの人から学ぶ以上に実際

の自分の体験で。ですからお金だけでプロモーションができるんじゃない、やはりいい投資というのは、やはりあらゆる要素に対してということを考えるならば、きちんとしたポリシーをつくって、そしてそれに則ってということでもあります。

中国はそういうチャンスをつかんでいるんじゃないでしょうか。我々が今知識を得ていっていると思うのです。メディアに聞くときにも、ニュースについても中国がこうだということを知る時も、そのまま鵜呑みにはしないんです。私自身、自分の目で考えることができると思っています。情報を自分でリアレンジするのです。真の状況はどうであるのかということ。日本についてもそうです。そうすることによって、我々はより多くのものを勝ち得られると思います。

○高松：

阪南大学の学生の皆さんは、海外旅行したことはありますか。どこの国に行きましたか、順番をお願いします。

○笹田：

日本に近い中国、香港、ベトナム、カンボジア、マレーシア、タイに行きました。

○高松：

すごいですね。

○副井：

私は少ないです。オーストラリアと香港にしか行ったことがないです。

○高松：

2か所行っていますから、少ないことはないです。

○古田：

私は、グアムと韓国に3回ほど行きました。

- 高松：
韓国に3回。はまっているんですね。
- 古田：
そうです。韓国の人と友達になって、何度か会いに行きました。
- 高松：
学校交流みたいな感じですね。
- 古田：
はい、そうです。
- 高松：
安江さんは、いかがですか？
- 安江：
私はグアムと韓国に行ったことがあります。
- 高松：
皆さんがそれらの国々に外国人旅行者として行ったときに、いろんな不便を感じたり、また、外国人である日本人でもこんなに楽に旅行できるんだと思うこともあったでしょう。それと同じ目で日本を見たとき、外国人にとって、日本は旅行しにくいのではないか、不便を感じるのではないか、と思うことはありますか？安江さんからお願いします。
- 安江：
まず公衆電話ですが、私がグアムから日本に国際電話をかけようとした際、公衆電話がすぐに見つかりました。使い方は友達と四苦八苦しなながら、何とか日本につながりました。日本では、友達と京都に遊びに行った際に、外国人の方から公衆電話の場所を聞かれたのですが、日本は携帯電話がとても普及しているので、京都のどこに公衆電話があるか私はそんなに分からず…。すると、私の携帯を貸してと言われましたが、貸す勇気がなくて、結局、その人とは別れたのですが、何もできなかった自分にとって罪悪感を感じました。多分その人以外にも、公衆電話を探して困った方は絶対いると思います。こんなにも観光に力を入れている京都なのに、日本人サイドでしか考えてないのかな、外国人が旅行しやすい環境にまだなっていないのかな、というのは海外に行き気づいたことかもしれません。
- 高松：
すごくリアルですね。これは大変な問題です。古田さん、何かお感じになったことはありますか？
- 古田：
私のイメージでは、海外に行くときはお金を財布以外にも分散して持たなければというイメージで、逆に日本はとても安全な国だと、私はとても感じています。
また、日本人はとても情があって親切ですが、困っている外国人に話しかけたいけれど、先ほどのお話のように、英語をちゃんと話せない、間違っていたらどうしよう、恥をかきたくないという気持ちが先に出てきて、話す勇気がない。でも、その勇気もつと日本人にあればと思います。私がグアムや韓国に行ったときは、日本語表記がたくさんあり、バスの運転手、もちろんホテルの方も日本語がとても上手で、すごく観光しやすかったです。
- 高松：
やはり日本人って、きちんと話せないと英語を話さない傾向があるんですね。APUの皆さんは、そうお感じになったことがありますか？エボンさん、どうですか？
- エボン：
そうですね、英語をしゃべらないとなると、英語を学ぶということに関心すら余りないように感じます。例えば日本と中国を比較しますと、中国の人は、外人を見るととにかく近寄ってきて質問をします。

そしてフレンドリーにしようとするし、英語を勉強したいということも言ってくれるわけですが、日本の方というのは、余りそういった努力をしようとしませんね。わからないというふうに言うてしまう。嫌なのかもしれませんが、とにかく日本の方と一生懸命会話しようとしたのですが、わかりませんと、とにかく逃げてしまうというところがあります。日本は、教育の分野で何かすべきじゃないでしょうか。そしてまた学生には英語をもっと勉強するように、そういった策が必要かと思います。

○高松：

なかなか面白い指摘ですね。日本人は相当長く英語を勉強しているはずですが、それを実際に使ってみることに気おくれしているのかもしれないですね。ティモシーさんもそんなふうに感じますか。

○ティモシー：

私はコミュニケーションのバリアということに関しては、相対的な話ですけれども、特に英語で話をしようという気持ち、意思というのが、私から言わせると、日本というのはインターディペンデントなカルチャーということを感じます。すなわち、ほかの国の人に自分自身を表現するという義務感を余り感じていないということでしょうか。それがやはりコミュニケーションにも影響を及ぼしていると思います。日本で英語を教えるシステムがもう少し改善されればと思います。すなわち英語を読むということ、あるいは書くということに関してはいいのですけれども、必要な、いわゆる言語でのコミュニケーション、話し言葉でということに関しては余り十分ではないと思います。

○高松：

日本の英語教育までさかのぼった問題になってきましたが、少し話を戻しまして、副井さん、ご自身が外国に行ったときに感じたこと、それから外国から日本を見たときに、少し何とかならないかと感じ

ることがありましたら、お話し頂けますか。

○副井：

高校生のときに、オーストラリアの姉妹校にホームステイという形で行き、ホストファミリーにはとてもよくしてもらって、いろんな場所に連れていってもらったり、休日にはアボリジニのところへ一度連れていってくれました。アボリジニの方たちが何をしゃべっているか全く分からなかったのですが、彼らは、食べ物だとか、住まいだとか、中までよく見せてくれて、彼らの伝統をすごく親切に教えてくれました。

でも、日本では、どうしても伝統を守っている人達は、外国人と接したことのないような高齢世代になってしまっていて、せっかく日本を知ってもらおうと紹介しようとしても、英語も全く話せないだろうし、外国人にどう接していいかも分からないから、それで終わってしまう。外国人の方はボディランゲージとかもよくしてくれますが、日本人はそういう表現力も余り持っていない気がします。逆に、英語が通じる観光地に行くと、どうしても日本の伝統は薄れているような、伝統の浅い部分しか見えないような気もするので、そういう点をもう少し考えていかなくてはと思います。

○高松：

ボディランゲージも含めて、もっと日本の普通の人たちが普通にコミュニケーションできればいいのというお話でした。とてもいい指摘だったと思います。これまで何カ国も行ったことのある笹田さん、いかがですか？

○笹田：

私は、ツアーに頼らず、国内・海外旅行ともバックパッカーで行きました。航空券と宿泊も自分で全部手配しました。国内は1週間で行き先はいろいろ、全部で8万円かかりました。一方、アジアに何カ国も行った旅行は、1カ月間で17万円かかりました。

17万円のうち航空券代に半分消えましたが、1週間の国内旅行とアジアの1カ月は、滞在費だけで見ると値段が変わらない。1週間の国内旅行のときは大体1日1万円使って、帰ってきたらお財布に200円しか残っておらず、ぎりぎりの旅でした。草津温泉で「部屋空いていますか」と飛び込みで行ったら、あと何分で一人用の部屋が空きます、と言われたぐらい満室状態で、宿泊施設がすごく少ないなと感じました。それに対して1カ月のアジア旅行だと、1泊360円ほどの安宿ですが、たくさんホテルがありました。そこに行けば、すぐ宿が見つかるというような。違いをすごく感じました。

○高松：

日本で例えば3,600円のような安宿、若い人向けの宿は見つからないですか。

○笹田：

そうですね。観光地でもそんなになかったの。

○高松：

今、様々な課題が指摘されました。まず、日本の情報がなかなか自国にないため、日本がどうも行きにくい、行ったら大変そうという印象を、訪日前に持ってしまう。日本へ来ればそんなことないのですが…。言葉の問題もかなり大きいようです。とはいえ、本当は日本人もコミュニケーションできるはずなのに、上手に話せない限り話さない、書くのはある程度できるだろうけど話すのは少し気おくれする、という問題もあるようです。それから、携帯電話中心の社会になったせいで、日本国内を旅行する際に公衆電話が見当たらないことも問題です。私自身も海外で公衆電話を探し回ったことが時々あり、最近是不安なので出国前に訪問先の国で使える携帯をレンタルします。やはり同じことを訪日外国人も感じているのかもしれませんが。それから、表記の問題も言葉の問題として出てきました。またこれも言葉の問題に関係しますが、日本人の外国人に接する

態度、もっと知ってもらいたい気持ちがあっても、ポディーランゲージでもいいのに表現できないのがもったいないというお話もありました。でも、それ自体も日本の文化かみしれず、日本全体でそれを変えていくのは、そう簡単ではないのかもしれない。それから、笹田さんからご指摘があった宿泊の問題は、確かに若者達にとってバリアになる可能性がある。日本でも、沖縄ですと那覇に素泊まり1泊700円、1,500円で空港送迎付という安い宿もありますが、本州だとそんな安宿はたくさんないようです。

それでは一体、こういった課題がある日本をこれから先、誰がどうしたら、もっと若い人にたくさん来てもらえるようになるのでしょうか。ナタリアさん、いかがでしょうか。

○ナタリア：

非常に複雑な問題だと思います。若い人たち、もちろん旅行の目的が異なります。海外に行く場合、いわゆる自分の国以外からの文化を吸収する、すなわち観光する、それからエンターテインメントを楽しんで、そして国に帰る。ほかの若い人たちの中には、やはり文化を学ぶために来る、あるいは言語を学ぶために来る人もいるでしょう。ですから、若い人たちが何を思っているかによって、また責任によっても違ってくると思います。例えば、もし若い留学生が新しい文化を楽しみたい、あるいは観光したいということであるならば、ウェブサイトで情報を得ることをする人もいるでしょう。ウェブサイトでの情報は、いわゆるネットワーキングがあればできるわけですから、どの国の人であれ、いわゆるホスト国の人たちの中で、ホームステイさせてあげるよというような情報を載せることもできるでしょう。こういったサイト、ネットワークというのは、やはりオフィシャルな、公式なサイトでやるべきだと思います。どなたかが公式なサイト、ネットワークを立ち上げて、ホームステイをだれが提供しているかということをチェックできるような体制を整えればいいと思います。そうしたほうが安全になると

思います。

それから、もう一つ、若い人たちが来る目的としては、いわゆる文化の経験をしよう、言語の経験をしようというのですけれども、そういう人たちというのは、ボランティアの仕事をしてみたり、インターンシップで参加をする、あるいは季節性の仕事をするということ。これは全く観光とは違う目的であるわけです。そこでの経験というのは、より深い経験ができるのです。つまり現地の人と交流があって仕事の経験もできる。ですから、完全にコミュニティーの中に入り込む経験ができるわけです。そういう意味で、政府がよいシステム、制度づくりをするべきだと思うんです。またそのほかNGOであったり、あるいはNPOであったり、ビジネス外でもいいと思うんです。インターンシップを提供するようなどころが何か制度化をするということも必要だと思います。そしてそれに対して責任をちゃんととることが必要だと思います。

また、メディアも重要な役割を果たすことができる。メディアとしては、若い人たちのツーリズムを促進し、よりたくさん情報をいろいろな国に対して発信をする。ボランティアの活動についての情報発信、それからインターンシップの情報発信。旅行会社が今度はそこで参加をするということ。ですから、政府の役割、それから産業界、メディア、そしてまた学生の何らかの組織、そういったことで役割分担していくべきだと思います。

○高松：

今のお話で、官民とマスメディアが各々役回りを担って行って初めて大きな流れになるのではと思います。では、その全体の動きをオーガナイズするのは、一体誰なのでしょう。

○ナタリア：

一番大きな役割というのは、やはり政府だと思うんですね。そして政府の中で何らか部門、またその下の部門かもしれないけれども、こういうような青

少年ツーリズムに対して責任を果たす人がいるべきではないでしょうか。

○高松：

政府がイニシアティブを取るべきだとのお話でしたが、ジュタコーンさん、タイでは政府あるいはTATの役割は一体どのようなものでしょうか。

○ジュタコーン：

ツーリズムが過去どうであれ、官民をつなぐコーディネーターのような役割をタイ政府観光局(TAT)は担ってきました。つまり、民間で何かビジネスを始めるのにどこに支障があるかなどの意見を聞き、それを関係当局に伝える役割です。例えばプーケットの例ですが、私が十代の頃には1日1本、B737のフライトだけでした。さらにプーケットへ繋がる道路は空港から1本だけ、プーケット市からパトンビーチまでも道路が1本しかなく、別のビーチに行こうとすると非常に難しいという状況でした。そこで、プーケットの人たちはTATに対して苦情を言ってきましたので、TATから提案し、タイ政府に対して、また内閣を通して、そして閣僚から特別な予算取りをしてもらい、プーケット開発のプロジェクトがスタートしました。ですから、官民のコーディネーションは、ツーリズムにおいてとても重要な役割だと思います。TATは半官半民で設立されたのが幸運でした。利益を上げない組織として予算を政府からもらえるからです。

以前に一度、UNESCAPが官民のコーディネーションについてのセミナーを開催したことがありました。我々は、明確に政府側の責任は何か、民間側の責任は何かを明示し、一体誰がその中で調節をするのかも明らかにするわけです。そうすることで官民が同じ方向を向き、同じ道を歩んで一つの目標を達成できるわけです。ですから、日本ではJNTOがこういった責任を果たすことができるのではないかと思います。

私が十代だった頃、日本については私のヒーロー

だった三船敏郎、侍の映画、それから私の大好きな日本の「上を向いて歩こう」（スキヤキ）の曲しか知りませんでした。現在では少なくなっていますが、日本の生活水準がそれほど高くなかった昔、タイからの日本へのグループツアーがたくさんありました。日本企業が経済成長を遂げたことが一つの磁石的な働きをしたと思いますが、日本企業がタイでの操業をどんどん広げたことで、タイ人たちは自分たちの子供に日本語を日本で学ばせたい、そして日本企業で働ければと考えるようになっていました。私が大学生の頃、タイ人に対する日本政府の奨学金があることを知りました。タイ政府経由で奨学金が与えられる形で、タクシン政府、副首相、ソムキット博士が日本で学生を学ぼうとしたわけです。

タイでは、インバウンドはもう50年前からスタートしていましたが、これまで日本は主に日本人を海外に送り出していました。今度はインバウンドが必要だと考え出したわけですが、ほとんどの国々はもう既にインバウンド推進を行っているので、我々は競争していかなければならない。でも何らかの形でさらに推進することはできると思います。

私どもが若い頃にはインターネットがなかったので、私が日本について学ぼうと思うと映画や歌しかなかったわけです。昔、日本で5年間トレーニングを受けたタイ人の男性シンガーがいます。彼は今もう高齢ですが、日本の歌を歌えますので、彼らを日本のツーリズムに活用すればいいわけです。例えばケイ・チョン先生がおっしゃったように、ジャッキー・チェンは香港観光大使となっていますので、同じようなことをすればいいわけです。台湾と日本は、歌の女王、テレサ・テンがいるので約50年間こういう交流をしてきました。この方たちも日本で研修をしました。彼女は非常に台湾、中国でとても有名なので、一つの戦術として活用すればいいと思います。

以前は多くの国は単にインバウンドのことしか考えなかった。でもこの新しい時代、新しい世代の時代では、我々はギブアンドテイクでやっていくべき

ということで、日本からの観光客も必要、また、タイからも日本へ送客するように努めています。また、日本国内では受入れ側として何をしなければいけないか認識すべきだと思います。

○クーパー：

コメントしていいですか。今の方についての意見についてですけれども、日本で欠けている点は、政府のいわゆる省が一つ欠けているということです。1983年にオーストラリアは観光省というのをつくっています。オーストラリアでも、例えばJNTOのような組織はそれまでもあったのです。でもそこで何か欠けていると、つまり直接政府とつながるような、そのリンクがなかったわけです。ですから、観光部局もできるだけ省のレベルに上げるということが必要だと思います。早くすべきだと思います。

それから、もう一つ、オーストラリアで認識したことは、ビジネスで出かけてくる人たちの90%は非常に小さな企業が担当しているわけであります。しっかりと管理ができていない。ですから、やらなければいけないのは、政府、それから地域の観光局がいわゆる管理能力というものを醸成する。そして小さな旅行会社の管理能力をレベルアップする。そしてこのツーリストが海外からやってくる、あるいは出ていく方でも、どのようなケアをすればいいかということトレーニングすべきだと思います。インバウンドのツーリズムを成功させる。日本は、一時はインバウンドの旅行者が非常に多かったわけであります。1920年代、それから1940年代、50年代に関しては、非常にこれは多かったわけです。インバウンド向けであったわけであります。そしてこれを再度見直すべきだと思います。

○高松：

クーパーさんがコメントしてくださいましたが、10月に観光庁が設立されました。まだ省になっていないですが、非常に大きなステップだと思いますし、まさに今、TATの例でジュタコーンさんにお話を

頂いたようなコーディネーター役を日本の観光庁に期待したいと思っています。

ここで、180度視点を変えて、日本の若者達の国際交流、海外旅行についてお話を進めたいと思いますが、先ほど私の講演でもお話したように、ここ10年間ほど、若い訪日外国人は増えているのに、日本人はなかなか海外へ行かなくなってきた。3～5年後には、この人数が逆転してしまうかもしれないところまで来ています。国際交流は双方向の動きがあってこそ初めて意味が深まるわけで、日本人の若者達が海外に行かなくなってきたら、今後の国際社会における日本は大丈夫かなあと心配になります。

まず、阪南大学の皆さん、今、周りの人たち、お友達、他の大学の方々、先輩、後輩のなかで、海外旅行に興味がない方は結構増えてきていますか。

○笹田：

先日、友達との卒業旅行にトルコ旅行の計画を立てた際、私はバックパッカー経験から、出会いも多く面白いと思って個人旅行を提案しましたが、友達は余り海外に行った経験がなく不安なのでバック旅行がいい、と議論になりました。私は不安がっている人を無理やり連れて行くのは良くないと思い、ツアーで行くことにしました。

私がバックパッカーとしてアジアで体験したお話ですが、「日本人は集団行動が多い」と、ある一人のヨーロッパの旅行者に言われました。集団行動とは、多分ツアーのことでしょう。また「一人でこんなところに来て、君はクレージーだ。」とも言われたほど、個人旅行する日本人は非常に少ないのだと感じました。さらにその人から、国境を越えればすぐ別の国なので、3カ国語ぐらい話せる人が結構いると聞きました。日本人が英語を話せないのは島国だから、と単純に思ったのが正直な意見です。

バック旅行か個人旅行かを議論した際、その中間的なツアーがあればいいなと思いました。例えば、私は安江さんとグアムにフリープランで行きました

が、ネット検索でトルコだとフリープランが見当たらない。グアムに比べてトルコは旅行しにくいかなということがありました。

○高松：

副井さんは、いかがですか。周りの方々、あなたご自身も含めて海外旅行はどんな感じでしょう。

○副井：

そうですね、基本的には皆さん、興味はあると思います。皆、行ったことのないところにはやっぱり出かけた、見たことのないものを見たい、関わっていない人にも関わりたいと、すごく本心的にはそう秘めていると思うのですが、今は情報化社会で、様々な情報が学生の私たちにも入り過ぎだと思えます。

○高松：

どんな情報が入ってくるのでしょうか。

○副井：

インターネット、テレビでも、どこの国が、どういう状況かもボタン一つで見ることができる。でも、それは逆に悪いところも見えてしまっているとも感じます。行きたいという気持ちが前に出る反面、とまる気持ちもそれによって生じる、葛藤が生じると思うのです。海外旅行する人が増えていた時代は、想像力だけで行っていた人がとても多かったと思います。でも、今は入り過ぎる情報がきっかけで理想と現実のギャップが生まれ、足がとまってしまい、年々減少傾向になってきている。今の人たちは、興味はあるけど踏み出せない、というのはあると思います。

○高松：

とてもおもしろい指摘です。情報が入り過ぎる、いわゆるマイナス、ネガティブな情報まで入ってきてしまい、それゆえ、興味はあるが踏み出せない。今のお話は、マーケットの状態をととても的確に言い表

しているのではと思います。古田さん、いかがですか。

○古田：

私はとても旅行が好きで、バイトしてでも旅行に行きたい気持ちがあります。でも先日、友達との会話で旅行は今しかできないと言ったら、バイトで得たお金で好きな服や、かばんを買うなど、旅行以外に魅力的なことがたくさんあるし、結婚したら旅行に行けないわけでもなく、歳をとってからでも幾らでも旅行できるから、別に今急がなくてもいいという話になりました。そのことを母親にすると、世代が違うのかなという感じで、母親の世代は、結婚したら旅行に行けないイメージがあったので、若いときにたくさん旅行したと。今若い人が旅行しないのは、他にもたくさん魅力があるし、いつでも旅行はできるという考えがあるのかなと思います。

○高松：

すごく大事な点ですね。大変失礼ですが、お母さまは40代、50代？

○古田：

母は50代です。

○高松：

今の50代の方々は、30代になったとき、ぱたっと海外旅行に行かなくなったのです。1990年頃の30代女性の出国率は10%を割っていました。結婚したら、子供ができたら、海外旅行なんて無理と言われて、行きたくても行けなかった時代なんですね。ところが、今の20代、30代の人たちは、「今でなくてもいつでも行ける」と思って結局海外旅行に行かないようです。安江さんの周りの方々は、いかがですか。

○安江：

私は、笹田さんと古田さんの意見に本当に同感ですが、私は笹田さんほど冒険心が余りない、度胸が

ないので、ひとり旅だったら楽に安くパッキングツアーで主要な観光都市を回るような、安全な旅行がしたいと思うタイプです。

古田さんが言ったように、旅行以外に娯楽があり過ぎると思います。私は旅行会社に内定をもらっていて、会社から「ほかの娯楽にお金を費やす人たちが、どうしたら店舗に来て、旅行を契約してくれるか考察せよ」という課題が出ました。旅行は何年か一回といった方たちも気軽に来てくれるような、コンビニみたいな、ちょっとお茶飲みに行こうと誘えるような旅行店舗にしたらいいのでは、と回答したのですが、本音を言うと、ブランド物のかばんか、旅行かと考えて、私は正直、ブランド物のかばんを買いましたが、そういう考えの若い子が多いのかなと思います。そこで、私は娯楽を対象とした旅行をつくれればいいと思います。私は鉄道、特に新幹線が好きなので、例えばその車両庫を見に行く、制服が着られる、そういうツアーができれば私は絶対参加するのですが。そのような様々な趣味と旅行を合わせたプランなら、旅行もできて、趣味にも費やせると、旅行をする若い子が増えるのではと思います。

○高松：

提案まで出てきました。旅行とそれ以外の娯楽、あるいはそれ以外のお金の使い方が競合しているとの指摘が出ました。これは、若い人に限ったことではありません。今の旅行市場を見ていると、例えば、オリンピックを見るために50万円のプラズマテレビを買ったので、今夏は海外旅行に行かなかったとか、わざわざ温泉に出かけるのは大変だから、近くにできた日帰り温泉で思いっきり一日過ごしたなどという事例がたくさんあるのです。今のお話のように、ブランドバッグか、旅行か、というような競合も出てきます。今は急激な円高なので、一昔前のようにブランドバッグを買いにシンガポールやソウルへ旅行ができますが、一時円安になったときは、海外よりも日本で買ったほうが安くなったので、これなかったようです。今のお話の中で注目したいの

は、「どこに行く」という話が一つもなかったことです。かつての旅では「どこに行く」が先にあり、そこで「何をやる」か考えたのが、今は「何をしたい」が先にあり、それができるから「どこに行く」という順で旅行の目的地の選び方が変わってきています。ですから、若者達を目を海外へ向けさせるには、海外でならもっと有意義にできるようなことを見せてあげるのもいい方法かもしれません。例えば、安江さんを海外へ行かせるには、まだ日本人があまり行っていない台湾新幹線の車両基地に入れてあげるとか。

では、今度はAPUの留学生の皆さんにも聞いてみましょう。APUにも日本人学生が6割程いると思いますが、彼らはあなたの方の国の若い人と比べて、海外旅行への関心は高いですか、同じくらい、あるいは、余り海外旅行に行く気はないかなという印象でしょうか。エボンさん、いかがですか。

○エボン：

カメルーンの若い人たちは海外に行きたがりますが、例えば日本の場合、ビザを得るのが非常に難しい。カメルーンの大学では、いわゆるそういった交流プログラムがありません。ですから、多くの学生は自分自身で資金を集めなきゃいけないし、例えば奨学金をもらわなきゃいけないということで、ただその中で入学を許可されたような場合、例えば私のようなラッキーな者の場合でも、やはりバリアがあります。すなわちかなり多額のお金を銀行にまずデポジットしなきゃいけない。大半の方はそういったお金の余裕がありません。オーストラリアの場合、ツアーでも何かアルバイトをすることができます。しかし日本ではそれができないという問題がありますね。なかなか難しい。

それから、中国と比較しますと、中国の場合、非常に数多くのホテルがあります。学生向けのホステルもあります。いわゆる学生がツアーリストとして行って、非常に安い値段で泊まることができます。日本もそういったことをやったらどうかと思いま

す。大学の中でも、そういったホステルを使って若い海外からのツアーリストを受け入れるということもいいんじゃないでしょうか。

○高松：

日本に来る若い人たちのことをお話ししましたが、日本人のクラスメートは海外旅行に行きたいと思っている、あるいは海外旅行に実際に行っていますか。

○エボン：

海外には行きたがっていると思いますし、実際に楽しんでいらっしやると思います。日本人の学生さんで本当に海外に行きたいという人はいますが、問題は多くの日本人の方は、それは英語を勉強するためだけというのがあると思うんですね。もっといろんな角度から見ていく必要があると思います。ですから、例えば大学の大半の学生の十分な需要には合っていない場合もあると思います。例えば教育ということ。そういった意味では、いわゆるツアーに行くということに関しては、そういった意味で分かりやすい場合もあるのかもしれませんが。もし自立をしているならば、やはり期待に合うようなものを求めるはずだと思います。ですから、そういった意味では自分の関心を半分ぐらいしか満たされないということがあるかもしれません。

○高松：

ナタリアさん、いろいろおっしゃりたいことがあるようですが。

○ナタリア：

日本の学生の場合、特にAPUで学んでいる学生さんたちは、非常に海外に行きたがると思います。例えば私の場合、この国際的な環境の中に入ったときに、それだけの知識を得た。すなわち、どんなメディアでも、どういったインターネットでも得られなかった経験をしましたし、知識を得ることができ

ました。単に人と話をするだけで、単純に生徒と話をすることで非常に数多くの国に対して関心を持ちました。いろんなところに行きたいと思う、こういった国際的な環境というのは、非常によいベースになると思います。すなわち、日本の学生さんたちにとってもこういった知識を持って、もっと知識を得て、そしていろんな人、いろんな文化を知る。そうしますと、その後で恐らく彼らはもっと海外に行こうという気になるでしょう。学生さんで、例えばローカルエクスチェンジプログラムというと、大阪ですとか、それ以外のところから来ている交流学生の方たちも非常に興味を持っています。私の国にも非常に興味を持ってくださっていると思います。

○高松：

A P Uの場合、87 カ国の生徒がいる特別な環境なので、興味を持つ国はたくさん出てくるだろう、多少他の大学に比べて学生は海外に興味を持ち、実際に行ってみたいと思う方々が多いというお話でしたが、轟先生からご覧になって、最近の学生達の海外旅行に対する志向はいかがでしょう。

○轟：

確かにうちの学校が、特にアジア・太平洋地域に関心を持って、地域研究をしようと思って来る学生が多いので、ほかの大学に比べたら、そうでもないかもしれませんが、同じような傾向がありまして、僕は90年代の初めに学生でしたが、そのころは、プラザ合意の後に急に円高になって、それからバックパックというのが一種のブームになって、だれでも大学生になったら、バックパッカーとして海外に出るようなものだというような道筋ができたんですね。一つのブームになっていて、逆に行かなければいけないみたいな義務感で行くような人も多かったぐらいでして、皆、「地球の歩き方」をバイブルみたいに持って、今は完全に昔の話ですけども、昔は個人旅行というだけでもすごく目新しくて、冒険心をくすぐられていたんですけども、今の学

生を見ていると、それ自体がもう食傷してしまうような、そういう時代になっている。今の学生の傾向はどうかというと、海外に対する関心はあるんですけども、そういったバックパックス的な旅行や、それこそツアー的な旅行ではなくて、現地に行って、どこに行くではなくて、何をやる、そっちのほうにすごく移ってきている。だから、従来型の旅行じゃなくて、例えば我々は国際交流のプログラムとか、それこそ青少年交流の我々、アクティブラーニングと言うんですけども、そういうプログラムを学生たちにどんどん提供しているんです。それというのは、講義としてやっていますけれども、登録の開始ですぐに締め切りになっちゃうような、そういう海外のアクティブラーニングプログラムというのはすぐに売り切れてしまうような盛況を呈しているんですね。

何かを経験したり、体験したり、あるいは自分の専攻に合った行動をしたり、勉強をしたり、そういうものは、すごく学生のモチベーションをくすぐっていて、すごく需要があるわけですね。どこに行くじゃなくて、何かをやる、何か貢献をする、そういった方向に学生の関心がシフトしているんじゃないかなという気がしております。

○高松：

学生が受け身になってきているというお話がありましたが、もう少し具体的にお話し頂けますか。あるいは、A P Uの学生さんで、日本人学生が以前に比べて受け身だということについて、どうお考えになるか、ご意見ある方、いらっしゃいますか。

○クーパー：

日本の学生さんでA P Uに来られるということは、いわゆるマルチカルチャーな経験をしたということ。87 カ国、これは日本の学生も含めてという意味で言っています。そのうちの半分ぐらいが日本の学生であるということ。ですから、このプログラムが成功しているのは、やはり日本の学生がかか

わってくれているからだということも言えると思います。ですから、そういった意味では大きな違いはAPUに関してはないと思っています。

○高松：

その他コメントありますか。ジョージさん、どうぞ。

○ジョージ：

私どものクラスは半分日本人で半分中国人がいますが、「どこから来たの」と聞かれまして、私は「ガーナ」と。私はケニアからというふうに彼は聞き違いをしたんです。だから、「ああ、そう、ケニアから。そしたらライオンとか象とか家の窓から見えるの」というふうに聞いてきました。ですから、「そうじゃないよ、私は町に住んでいるんだよ。そしてみんなが住んでいるような家に住んでいるんだよ」という話をしました。だからこういうふうにいわれる情報が少ないということ。それから海外に出かけるチャンスもない。ですから、若い世代にとって難しいのは、海外に出かけたいと思ったとしても、実際実行できる人たちというのはやはりそれは限られていると思います。パッケージツアーに参加するということが多いかと思うんです。パッケージツアーに行きますと、違ったところに行けない。例えばラテンアメリカに行きたいとしたとしても、その機会があるか。例えば言語を学ぶ機会はできるかもしれません。言語学校に入るのではなくて、ほとんどの日本人の場合には語学といえば書けるけれども、でもしゃべれない、しゃべるチャンスがないからということなんです。でも実際その地域社会に出かけて行って住むようになりますと、私のことを考えてみれば、日本語を覚えなきゃしょうがないということです。ですから、右左、みんな日本人、どこを見ても日本語をしゃべっている。だから私もそうせざるを得ないわけでありまして。だから、教室だけ座って勉強するのではなくて、いわゆる町の中でその言葉をピックアップして、学ぶことができるわけです。ですから、日本の青少年に魅力のあることをパッケージ化するということ

がいいと思うんです。それがパッケージグループ旅行であれば、バックパッカーであっても、大部分の人たちというのはやはりパッケージツアーを好むかと思っています。

○高松：

これまで日本の若い人たちをどうしたらもっと海外へ行く気にさせることができるかというディスカッションをしてきましたが、何かコメントやパネルの皆さんに対するご質問のある方がいらっしゃいましたら、どうぞ。

○参加者：

奈良県立大学地域創造学部観光学科4年の村本と申します。まず最後の課題に挙げた日本の青年が海外に興味を持っているのかという議論で、パネルディスカッションの中で出てこなかった議論を言いたいと思います。

高松さんの発表の中で、若い人の非正規雇用の増加という現状を、僕は重要視しないとイケないのかなと思います。僕の周りには、結構お金を持っている若い人もいますが、海外旅行なんて夢、という余裕のない学生やフリーターも結構大勢います。そういう状況の中で、海外に興味を持つのは非常に難しいのかな、日本がこれからグローバル化の中で海外に興味を持てるかどうかは、やはり経済状況が影響してくるのかなと思います。

もう一つ、教育の側面ですが、パネルディスカッションの中でも結構話されたと思いますが、日本の英語教育は果たして今の若者達に海外へ興味を向けさせる動機づけになるのか、僕は全く逆だと思っていて、受験志向の英語は、学生や若い人に英語嫌いを植えつけてしまい、海外への興味を削いでしまうというのが、僕らが教育を受ける段階であると思います。海外に興味を持たせる英語教育という視点で、日本の英語教育のあり方を考えていく必要があるのかな、経済状況もそうですが、そういうことを総合的に勘案して、今後インバウンドもアウトバウンド

も考えていかなければいけないと思っています。

○高松：

今、コメントが出ましたが、一つは非正規雇用の問題が非常に大きいだらうということ。それから、どうも日本の英語教育が、若者達の目を海外へ向けさせるようになっておらず、むしろ受験体制の中で海外から目をそらさせているのではないかと指摘されましたが、日本の英語教育を受けられた阪南大学の学生さんでどなたか、それに対してコメントはありますか。

○安江：

私は英語をそれほど嫌いではなく、文法と、外国人の方との会話という授業を2種類受けました。文法の授業は、ディス イズ ア ペンなどばかりで、そんなのを延々と繰り返しても、絶対旅行に行きたくならないと思います。それより、アポリジニのことや、観光に関連する勉強を中学校くらいからしたほうが、いつかここに行きたいというような好奇心が芽生えてくると思うので、先ほど村本さんが言われたように、受験英語ばかりでなく、遊びではないですが、勉強しながら旅行に行ったかんじになるような教育をしたら、旅行に行きたくなくなるかなと思います。

○高松：

中学からという話でしたが、皆さんの中で中学以前、小学校で英語に触れたことある方いらっしゃいますか。

○副井：

塾で、5年生か、高学年になってからですね。

○高松：

それは何か影響はありましたか。

○副井：

そのときは、A、B、Cの発音からだったので、

特に何か文法を難しく組み合わせたり、といった勉強はしませんでした。

○高松：

小学校5年生の頃から始めた英語は、英語を好きになるきっかけになりましたか。

○副井：

好きにはなりました。塾の先生をまず好きになれたことから始まったので、英語が好きになるというより、人を好きになってから始まったというのが大きいと思います。

○高松：

ティモシーさん、お願いします。

○ティモシー：

私が言いたいのはAPUの学生というのは非常に幸運だと思うんです。数は少ないですけども、そして経済的にも恵まれた人たちが来ているわけです。ただ日本の状況、購買力というのは家族の収益というのは、10年前でも今でも同じだと思います。でも、生活の経費というのがここ30年間どんどん上がってきているわけで、これは経済学者、経済官僚の人たちが言っていることであります。ですから、こういう学生というのは、海外に出かけていく機会はあるって、アルバイトをして、そしてバックパックを担いでということ、そういう資本主義の社会ではそういうことも可能であるわけです。

でも、私の解決策としては、NGO、JICAのような組織、そのほかの組織もまた専門学校もそうですけれども、いろいろな国で学ぶ協力提携をやっていて、プログラムを展開しています。例えば貿易をやる人たち、高等教育を受けなくても海外に出かけて行って、例えば港湾の仕事であるとか、それからまた農業の活動をするということもあります。そして、自分自身がその地域の社会に出かけて行って言語を学ぶことができるわけです。日本の資産とい

うのは、日本人たち自身にあると思うんです。日本人は海外で会ったときに日本の大使として役割を果たしているわけです。彼らの心の温かさ、やさしさというのに触れて、そして外国人学生は日本に來たいと思うんです。皆さんの一番の資産というのは、そのやさしさにあると思います。

○高松：

まさに、国際交流親善大使の役割を一人一人が果たしていく、というようなご提案がありました。もうお一人、何かご意見、コメントがあればどうぞ。

○参加者：

旅行会社に勤めています西村と申します。先ほどの続きになりますが、もう少し、日本の受験英語と実用英語を考えてみたいのですが、ランゲージバリアという言葉も出ましたが、単なるランゲージでなく、コミュニケーションのための英語をもっと勉強させていくと、実際自分の目で見て、口で食べて、頭で考えて、を海外でやってみたいという動機づけにもなると思います。何より、日本人は遠慮し過ぎというか、英語は話せるだろうけど、コミュニケーションに積極的でない。それって何か、外交にも似ているのではないか、島国根性の悪いところかなと。ですから、日本の総理大臣も、ツーリズムとか、海外との交流を発展させていったら、日本の国力、平和のみならず、外交も将来担っていけるような人を育てるぐらいの観点で、観光庁のみならず、国を挙げて取り上げて欲しいと考えております。

結 論

今の日本の若者達が海外へ目を向けるかどうかは、最終的には、日本が世界の中でどう認識されるか、どういう立場になるか、ということと大きく関わっているのだと思います。また、今ご指摘のあったコミュニケーションのための言語は、英語だけでなく、中国語、韓国語もそう、タイ語もそうかもしれません。実際にAPUの学生を私の会社でもインターンとして随分受け入れましたが、4カ国語話せる人はざらにいます。例えば、20歳くらいのマレーシア人学生は、マレーシア語、北京語、広東語、日本語、そして今は韓国語を学んでいます。それに比べて、どうして日本の学生は英語一つでさえできない、何が違うのだろうと感ずることもあります。

これまでの議論で、アウトバウンドに関して日本の若者達に共通しているのは、皆さん海外に興味があるということです。興味そのものがなくなっているという話は、本日一回も出てきていない。でも、海外には行かない、行けない。その理由の一つは、先ほどご指摘があったように、経済的な問題かもしれません。でも、旅行に出かけている日本以外のアジア諸国の若者達は、必ずしも富裕層の子ばかりではない。働いてお金を貯めて、ブランド物でなく、海外旅行にお金を使っているのではないのでしょうか。もちろんブランド物のバッグも買えて、豊かな生活もでき、旅行もできればいいですが、ブランド物は買えなくても旅行に行ける国の人たちがいる、行っている日本人がいるのは、それまでのベクトルの向け方、オリエンテーションの仕方なのかも、そういったことも考えてみる必要があると思います。

それから、教育の話が随分出てきました。単に言葉の話だけでなく、やはりコミュニケーションだとか、世界に目を向けるような教育、この辺は最終的には学校の先生の問題でもあるかもしれません。例えば今、

ツーリズム・マーケティング研究所
取締役マーケティング事業部長

高松 正人



中学や高校の先生方がどれだけご自身の体験を生徒に話しているか。

もう一つ、皆さんのお話で随分出てきたのが、何かをするための旅行、旅行の目的ということです。何かをするための旅行が、幾つかのパッケージとして具体的に用意され、選択できるようになってくると、若者達はもう少し海外に向けて動機づけされるのでは、というご提案もありました。

今日のパネルディスカッションで指摘された課題を、具体的にどう解決していけばいいかを考えながら、民と官がコーディネーションをうまくとって進めていくことで、若者達のインバウンドも、アウトバウンドもまだまだ発展させられる可能性は十分あるのではないのでしょうか。また、今後日本が国際社会の中で生きていく、活躍していく、貢献していくため、若者達の交流を大きく伸ばしていくのは、彼らの先に立つ、我々の世代の責任でもあるのではと考えます。

積極的なパネルの皆さんのご発言に本当に助けられました。ありがとうございました。また、コメントーターの皆さんからも、様々な形で進行にご協力を賜りましたことを、改めて御礼申し上げたいと思います。

以上をもちまして、パネルディスカッションを終了させて頂きたいと思います。ご清聴ありがとうございました。

総括

国連アジア太平洋経済社会委員会（UNESCAP） ツーリズムユニットチーフ
山川 隆司



私の最後の言葉は、とにかく主催者側の方々に感謝を申し上げるということですが、その前に、今回のセミナーは非常に有益であったということ、非常に興味深いものでありました。また非常に生産性の高いものでありましたし、まさに非常に数多くのことをこのユースツーリズム、青少年のツーリズムから学ぶことができました。

最初に、青少年ツーリズムを理解するのは非常に難しいということを理解しました。といいますのも、いろいろなファクターがかかっています。例えばデータが不足しているとか、あるいは情報が十分でないとか、あるいは研究がまだ十分でないといったようなこと。

また、2番目に、恐らく皆さん方、一致されると思いますが、こういった重要なエリア、まさに青少年ツーリズムに関しましてはもっと理解し、もっと焦点を当てるべきであると。そしてまた、共通の理解として、青少年ツーリズムというのは、その地域の社会に対してもメリットがあるし、また国際的なつながりを強化する上でも役に立つ、また国際的な理解を深める上でも有益なツールであるということを理解すべきだと思います。もちろん、数多くの問題も確認されました。そしてまた、数多くの非常によい提言といったこともお話ができました。

しかしながら、一番重要な、あるいは有益な提言というのは、前田先生がお話しになったところでメカニズムであるということでした。すなわち、体系的にこの青少年ツーリズムを促進して、進めていく上でのメカニズムが必要だということ。これは非常に重要だと思いました。また、それ以外のスピーカーの方々もおっしゃいましたけれども、パートナーシップが非常に重要であると。これは産業界だけではなくて、やはり提携あるいは協力、あるいはかなり集中的なコンサ

ルテーション、パートナーシップ、これは民間そして公的な部門、そしてまたコミュニティーとの間のそういった関係が重要だというお話ができました。すなわち、やはりコンセンサスというのが重要であると。

では、すべての主催者に対して感謝申し上げたいと思います。一番初めに、UNWTOアジア太平洋センターに対しまして心より感謝を申し上げ、拍手でその謝意をあらわしたいと思います。

それから、もちろん数多くの皆様方に、今回のこのセミナーの成功にかかわっていただきました。さまざまな世界各地からもご参加いただきましたし、また日本からもご参加をいただいております学生さんも含めて、そしてまた数多くのこちらに座っていますスタッフの方々ですね、いろいろな技術的な問題に対しても対応してくださいましたし、また同時通訳のほうにも感謝申し上げたいと思います。すばらしい仕事をしていただいたと思います。ありがとうございました。

ということで、UNWTO、そしてそれ以外のすべての関係団体の皆様、そして人々に対しまして、心より感謝申し上げるとともに、またさらなる今後の繁栄を心よりお祈りしたいと思います。皆さん、ありがとうございました。

学生ガイド・ツアー：歴史文化都市・堺のまち歩き観光について

阪南大学教授 前田 弘

本国際セミナーのエクスカージョンとして企画された学生ガイド・ツアーは、セミナー参加者（講演者・APU パネリスト他）が実際のツアーに参加して、参加者同士や地域の人びとと交流しながら、今後の青少年ツーリズムの内容や方法について考えるものである。このツアーは、セミナーのパネリストである学生自身が企画、ガイドするユニークなスタイルとなった。また、その企画・運営には、ツアー地である堺市の観光担当行政、観光ボランティア、寺院、刃物・線香などの地場産業に従事する住民の方々の全面的な協力と支援を受けている。

この学生ガイド・ツアーの第一の意義は、ツアー自体が本セミナー・テーマの青少年ツーリズム交流の「実践の場」となったことである。ツアーでは、パネリストやオーディエンスとして参加した日本人学生たちがホスト役となってコミュニケーションを深められたので、パネルディスカッションだけでは得られない楽しさと親しみのあふれる交流となった。第二の意義は、地域社会との交流が図られたことである。このツアーは、ツアー地の堺市住民との「ふれあい」をベースにしたコミュニティ・ツーリズムである。そのため、ホストとゲスト間の交流以上に、参加者の地域社会に対する関心が深まり、心に残るツアー体験となった。また、日頃、一般ツアー客を相手にしている地元住民も、観光や文化交流を学ぶ若い世代との交流に大変感動し、青少年ツーリズム交流に対して強い関心と期待を抱くようになっている。

以上のように、参加学生と地域社会とのパートナーシップによって実施できた学生ガイド・ツアーは、交流の場だけではなく、青少年ツーリズム交流のいわば「モデルケース」としても機能したといえる。今後も、青少年ツーリズム交流をテーマとして、こ

のような多様な内容を伴った国際セミナーの展開を望みたい。

Programme

09 : 30	Opening Addresses	P.71
Mr. Masato Kakami	Director-General, Kinki District Transport Bureau, Ministry of Land, Infrastructure, Transport and Tourism, Japan	
Mr. Yuichiro Honda	Chief of the UNWTO Regional Support Office for Asia and the Pacific	
Mr. Toru Hashimoto	Governor, Osaka Prefecture (Message Read by <small>Director General, the Department of Dynamic Osaka Promotion, Osaka Prefectural Government</small> Hiroshi Masaki)	
10 : 00	Keynote Presentation The Outlook of Current Trend of the Tourism Exchange for Young Generation in Asia and the Pacific	P.77
Mr. Ryuji Yamakawa	Chief of Tourism Unit, UNESCAP	
10 : 25	Presentation Youth Tourism Exchanges: Experiences from Hong Kong	P.84
Dr. Kaye Chon	Chair Professor & Director, School of Hotel and Tourism Management The Hong Kong Polytechnic University	
10 : 50	Presentation Promotion of Korea/Japan, Tourism Exchange for Young Generation	P.89
Dr. Sang Taek Lim	Chairman of the Board, Asia Pacific Tourism Association (APTA) Professor, School of International Tourism & Director, Tourism Research Institute, Dong-A University	
11 : 15	Coffee break	
11 : 30	Presentation The Promotion of Thailand/Japan Tourism Exchange for Young Generation: Prospects and Issues	P.92
Mr. Suwat Jutakorn	Director, Marketing Database Group, Policy and Planning Department, Tourism Authority of Thailand	
11 : 55	Presentation Australia Japan Tourism Exchange for Young People	P.97
Dr. Malcolm Cooper	Professor & Vice-President, APU	
12 : 20	Lunch Break	

1 3 : 2 0	Presentation The Trend and Style of Tourism with Japanese Youth for Mutual Understandings of Asia and the Pacific Countries	P.100
	Mr. Hiroshi Maeda Professor, HANNAN University	
1 3 : 4 5	Presentation The Current Situation of Educational Tourism Exchange for Accepting Foreign Youth to Japan	P.105
	Mr. Masafumi Yuasa Educational Exchange Coordinator, Osaka Prefectural Government	
1 4 : 1 0	Presentation The Current Trend and the Issues of Tourism for Japanese Youth from the Viewpoint of the Travel Industry	P.109
	Mr. Masato Takamatsu Director and Vice-President, Marketing, Japan Tourism Marketing Co.	
1 4 : 3 5	Coffee Break	
1 4 : 5 0	Panel Discussion and Q & A What are the Optimum Conditions and Arrangements for Supporting the Tourism Exchange of Youth in Asia and the Pacific	P.119
	Moderator: Mr. Masato Takamatsu Director and Vice-President, Marketing, Japan Tourism Marketing Co.	
	Panelists: 4 students from HANNAN Univ. 4 students from APU	
	Commentators: Presenters	
1 7 : 3 0	Conclusion	P.140
	Mr. Masato Takamatsu Director and Vice-President, Marketing, Japan Tourism Marketing Co.	
1 7 : 4 5	Closing Remarks	P.141
	Mr. Ryuji Yamakawa Chief of Tourism Unit, UNESCAP	
1 8 : 0 0	Closing of Seminar	
1 8 : 1 0	Reception	
1 9 : 3 0	Closing	
1 1 th	Student-Guided Tour	P.142